

Guidance for Entrance Exam 2026

東京大学地震研究所

2026年度(2025年度実施)大学院入試ガイダンス



東京大学 地震研究所

Earthquake Research Institute

The University of Tokyo

<https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/education/>



大学院への進学を考えている皆さんへ

地震研究所では、「地球科学」の研究を通じ、我々の住む地球で起こっている現象のしくみを明らかにしています。地震・火山現象の表面的な理解だけでなく、その根源となる場の性質や物理・化学過程を明らかにし、大きな固体地球システムの1つの側面としてこれらの現象を理解することを目標としています。

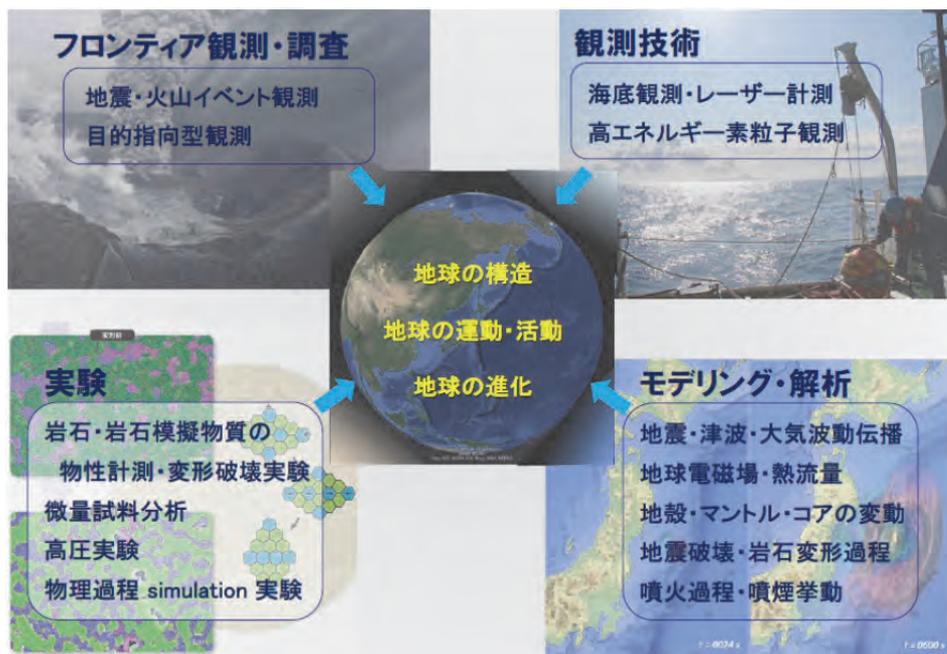
「地球科学」というと縁遠い世界と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、皆さんが学んできた「物理」や「化学」などを用い、地球を調べているにすぎません。ですから、学部時代から地球科学を志していた方だけでなく、数学・物理・化学・情報科学など、他分野を専攻された方々も進学してくれることを、心から望んでいます。

現在、地震研究所では大規模観測や観測技術開発など、以前から定評がある研究分野をさらに推し進めるとともに、異分野との融合による新たな地球科学の創出に力を入れています。レーザー技術を応用した地殻変動観測、高エネルギー素粒子を用いた地球内部透視技術の開発、最先端の統計学・情報処理技術を用いた地震波形解析手法の開発などは、これらの取り組みの例です。皆さんの常識にとらわれない発想により、また新たな分野が切り拓かれることを、大いに期待しています。

地震研究所に少しでも興味を持たれた方は、ぜひ一般公開や入試ガイダンスなどに参加して、我々の研究を間近で見てください。

地震研究所 教員一同

※地震研へのアクセス・連絡先は最後のページに記載されています。



INDEX

理学 理学系 **工学** 工学系 **学情** 学際情報 **情理** 情報理工 (兼) 兼務教員

数理系研究部門

理学 亀 伸樹	1
理学 西田 究	2
理学 鈴木 雄治郎	3

地球計測系研究部門

理学 中谷 正生	4
理学 今西 祐一	5
理学 綿田 辰吾	6

物質科学系研究部門

理学 平賀 岳彦	7
理学 安田 敦	8
理学 三浦 弥生	9

災害科学系研究部門

理学 古村 孝志	10
工学 楠 浩一	11
工学 毎田 悠承	12
学情 理学 三宅 弘恵 (兼)	13

地震発生予測研究センター

理学 加藤 愛太郎	14
理学 加納 靖之	15
理学 望月 公廣	16
理学 福田 淳一	17

火山噴火予知研究センター

理学 市原 美恵	18
理学 前野 深	19
理学 行竹 洋平	20



海半球観測研究センター

理学	清水 久芳	21
理学	竹内 希	22
理学	馬場 聖至	23
理学	一瀬 建日	24

高エネルギー素粒子地球物理学研究センター

理学	田中 宏幸	25
----	-------	----

計算地球科学研究センター

工学	市村 強	26
工学	Wijerathne Maddegedara	26
工学	藤田 航平	26
情理	長尾 大道	27

地震火山研究連携センター

理学	加藤 尚之	28
理学	内田 直希	29
理学	小山 崇夫	30

観測開発研究センター

学情	酒井 慎一 (兼)	31
理学	篠原 雅尚	32
理学	大湊 隆雄	33
理学	新谷 昌人	34
理学	蔵下 英司	35

日本列島モニタリング研究センター

学情	鶴岡 弘	36
学情	中川 茂樹	37
理学	岩森 光	38
理学	青木 陽介	39
	五十嵐 俊博	40
理学	石山 達也	41

学生会からのメッセージ	42
-------------	----

部門	担当教員	大学院				研究対象				手法						ページ	
		理学系	工学系	学際情報	情報理工	地震	火山	内部構造・機構	災害	理論	観測・解析	実験・開発	地質	計算機	物質分析		歴史史料
数理系研究部門	亀 伸樹	○				○				○				○			1
	西田 究	○				○	○	○		○	○						2
	鈴木 雄治郎	○					○			○				○			3
地球計測系研究部門	中谷 正生	○				○					○	○					4
	今西 祐一	○				○	○				○						5
	綿田 辰吾	○				○	○	○	○	○	○						6
物質科学系研究部門	平賀 岳彦	○				○	○	○				○	○		○		7
	安田 敦	○					○					○	○		○		8
	三浦 弥生	○					○					○			○		9
災害科学系研究部門	古村 孝志	○				○			○	○				○			10
	楠 浩一		○			○			○		○	○					11
	毎田 悠承		○			○			○		○	○					12
	三宅 弘恵 (兼)	○		○		○			○	○	○						13
地震発生予測研究センター	加藤 愛太郎	○				○		○			○						14
	加納 靖之	○				○	○		○				○		○		15
	望月 公廣	○				○		○			○						16
	福田 淳一					○				○	○			○			17
火山噴火予知研究センター	市原 美恵	○					○			○	○	○					18
	前野 深	○					○						○		○		19
	行竹 洋平	○					○				○						20
海半球観測研究センター	清水 久芳	○						○		○	○						21
	竹内 希	○						○		○	○			○			22
	馬場 聖至	○						○			○						23
	一瀬 建日	○						○			○						24
高エネルギー素粒子地球物理学研究センター	田中 宏幸	○				○	○	○			○	○				25	
計算地球科学研究センター	市村 強		○			○			○	○				○			26
	Wijerathne Maddegedara		○			○			○	○				○			26
	藤田 航平		○			○			○	○				○			26
	長尾 大道				○	○				○	○			○			27
地震火山研究連携センター	加藤 尚之	○				○				○							28
	内田 直希	○				○		○			○			○			29
	小山 崇夫	○					○	○		○	○			○			30
観測開発研究センター	酒井 慎一 (兼)			○		○	○	○	○		○	○	○	○		○	31
	篠原 雅尚	○				○					○	○					32
	大湊 隆雄	○					○				○						33
	新谷 昌人	○				○	○				○	○					34
	蔵下 英司					○		○				○					35
日本列島モニタリング研究センター	鶴岡 弘			○		○				○	○			○			36
	中川 茂樹			○		○		○		○	○			○			37
	岩森 光	○				○	○	○				○	○	○			38
	青木 陽介	○				○	○				○						39
	五十嵐 俊博					○		○			○			○			40
	石山 達也	○				○		○			○		○				41

理論：数理的・理論的な研究、解析手法の研究

観測・解析：観測研究、観測データの解析による研究

実験・開発：室内実験や実験的手法に基づく研究、観測機器の開発

地質：地質学的なフィールド調査による研究

計算機：数値計算的なアプローチや大規模計算による研究

物質分析：地球化学分析や結晶形態等の組織分析による研究

歴史史料：歴史史料に基づく地球科学的な研究



准教授 亀 伸樹



D1 大谷 哲人

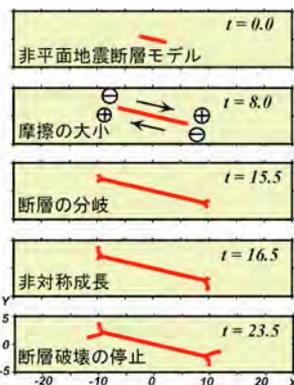
●● 研究室の特色：地震発生過程の理論的研究 ●●

地震は地下の断層が破壊することで起きます。地震の起こり方は、皆さんご存じのように大変複雑です（強い非線形性を持っているようです）。そのため、大地震の発生予測手法を確立するためにはまだまだ難関が待ち受けていることでしょう。私たちは、地震の起こり方はなぜ複雑なのか、どのように複雑なのか、地震の発生は予測可能かなどに関心があります。

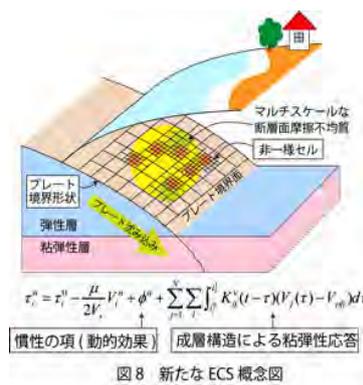
亀研では、実験室で調べることのできない地震発生過程に対して、物理モデルを考え方程式で表し、紙と鉛筆をつかって理論的に、あるいはシミュレーション手法を用いて、その背後にある物理機構を解き明かそうとしています。また、観測データと物理モデルを組み合わせ「地震天気予報」を目指すデータ同化研究をはじめました。物理/数学/計算機の何れかが得意で理論的研究に強い興味があれば、研究を始めるにあたり地震学の知識は問いません。

●● 研究紹介 ●●

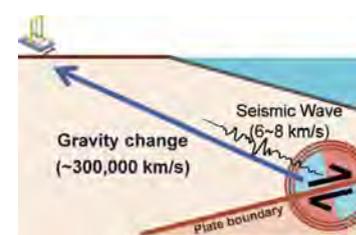
◎地震断層の複雑破壊ダイナミクスの研究



☆巨大地震発生サイクルのシミュレーション研究



★光速の重力変化を用いた地震早期検出の研究



4年生特別研究テーマ
 深層学習による地震データ解析
 地震天気予報のデータ同化研究



亀研連絡先：亀 伸樹 地震研 2 号館 2-403 号室
 TEL: 03-5841-5694
 E-mail: kame@eri.u-tokyo.ac.jp
 HP: www.eri.u-tokyo.ac.jp/people/kame



教授 西田 究

大気・海洋現象が引き起こす固体地球の弾性振動現象
～大気・海洋・固体地球を駆け巡る波～

Tel: 03-5841-5723
E-mail: knishida@eri.u-tokyo.ac.jp
居室：地震研究所 2号館 409号室
<https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/knishida/>



私たちは、大量の地震計・気圧計・水圧計などのデータを丹念に解析し、ノイズとされていた記録の中から新たな振動現象を探り当て、その謎の解明を目指しています。その際、大気-海洋-固体地球の大きな枠組みで現象を捉える事が重要です。具体的な研究テーマは大きく分けて2つあります。それぞれ、(1)地震以外が引き起こす地球の振動現象の励起メカニズムについての研究、(2)地震以外の地球の振動を使って地球内部構造推定とその時間変化の検出です。

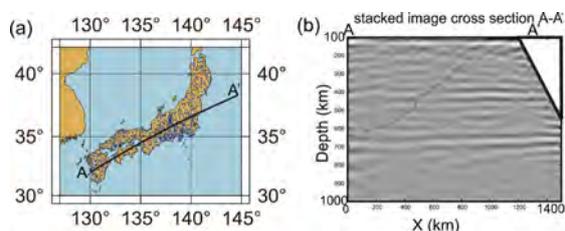


1. 何が地球を揺すっているのか？

地震が起きていない期間には、地球は振動してないのでしょうか？ 実は、地球は常に海の波によって常に揺すられている事が知られています。例えば脈動と呼ばれる周期5秒から20秒程度の地面の振動が知られています。どのように大気・海洋現象が固体地球を揺すっているかに関して、未だ未解明な点が多く、大気-海洋-固体地球の大きな枠組みでの研究が進行中です。一緒に謎に迫ってみませんか？

2. ”地震以外の揺れ”を使って地球の内部構造を探る！

我々の研究グループでは、地震波干渉法という手法を武器にデータを調べる事によって、ローカル・リージョナル・グローバルに関係無く、全てのスケールの現

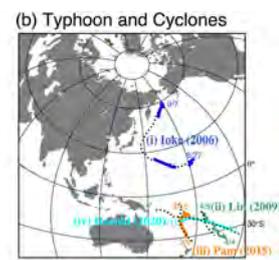


Kato and Nishida (2023)

象に切り込んで行きます。現在地球深部構造推定に取り組んでいます。解析手法の開発自体も大きな研究テーマとなります。

3. 環境地震学に向けて

地球の内部を調べる際に地震が起こるのを待つ必要が無いというのは、この手法の大きな強みです。地動ノイズを観測し続けてさえいれば、時々刻々と地球の内部構造の時間変化をモニタリングする事が可能となります。火山噴火や、地震現象にともなう地震波速度構造の検出し、その物理メカニズムを解明することが大きな目的です。今世界的にはさらに、多くの関連研究分野(水床・水文学・海洋物理学)を巻き込み、環境地震学として新たな研究分野が生まれつつあります。地震計を使って、大気・海洋現象、例えば台風を追跡することも可能です。日本には長年のデータの蓄積があります。環境地震学の創出をめざしてみませんか？



Nishida and Takagi (2022)



准教授 鈴木雄治郎

研究の概要

ダイナミックな火山噴火現象の理解を目的に、数値シミュレーション・流体実験研究を行っています。

メンバー等

鈴木雄治郎（数理系研究部門・准教授）

Tel: 03-5841-5680

E-mail: yujiro@eri.u-tokyo.ac.jp

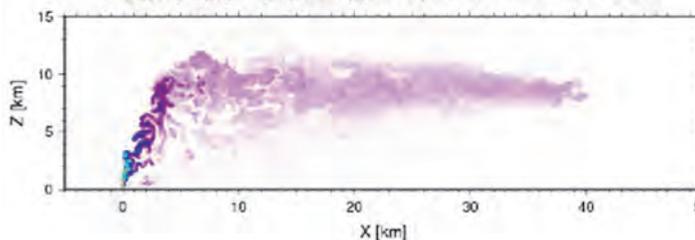
居室: 地震研究所 2号206号室

<https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/yujiro/>

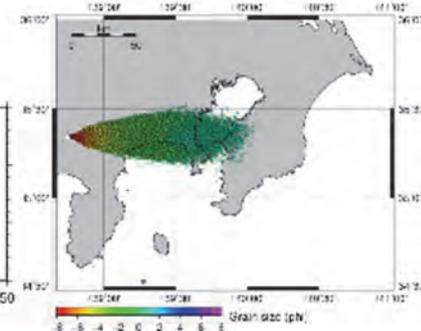


1. 火山噴煙・火山灰輸送の数値シミュレーション研究

- ・ 3次元数値モデルの開発
- ・ 噴煙高度・拡大の様子をシミュレーション



火山噴煙の3次元シミュレーション



富士山の降灰シミュレーション

2. 爆発的火山噴火の室内実験

目的: 桜島のような瞬間的爆発噴火の噴煙ダイナミクスの解明



研究テーマ案

- ・ 近年の火山噴火(ルアング火山2024年噴火等)をシミュレーションで再現、噴火条件の解明
- ・ 地形を考慮した火砕流のシミュレーション研究
- ・ 火山ガス輸送のシミュレーション研究
- ・ 溶岩流の防災モデルの開発
- ・ 地質調査データと数値シミュレーションを合わせたカルデラ噴火の解明 等



教授 中谷 正生

研究の概要

地殻岩石の脆性破壊現象である地震の発生時期や破壊の大きさはどの程度に予測可能か、特に大きな地震のおこりやすい物理的状態というものが存在するのか(≒原理的にどこまで可予測性か)?という興味から、断層力学に関する実験・理論、前兆現象候補の統計評価等の研究を行っています。

Tel: 03-5841-5763

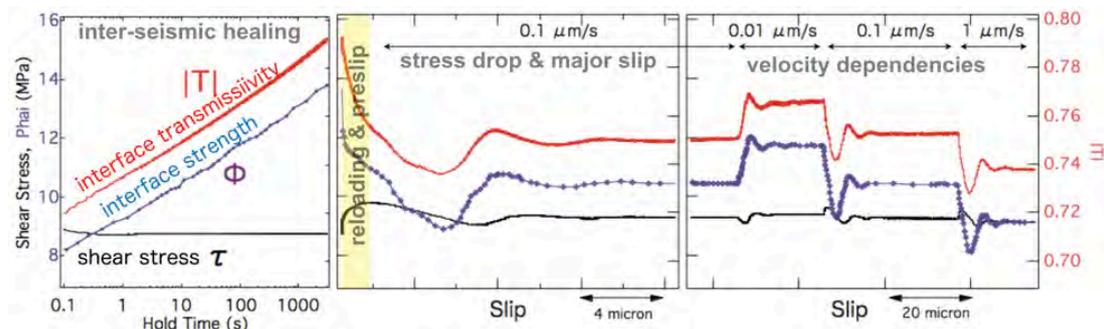
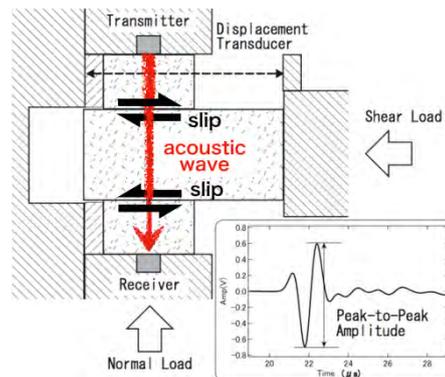
E-mail: nakatani@eri.u-tokyo.ac.jp

居室: 地震研究所 2号館 311号室

<https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/KOHO/STAFF2/nakatani.html>

1. 摩擦強度のリモートセンシング法を發明

- ・ 滑り面の音波透過率 T をモニターしながら摩擦実験をし(右図)、
- ・ 摩擦のレオロジー解釈から、 $\Phi = \tau - A \ln V$ として時々刻々の剪断応力 τ と滑り速度 V から求められる摩擦強度 Φ と比べると、
- ・ 模擬地震サイクルを含むあらゆる滑り/载荷の履歴を通じて、 T と Φ は同じように変化(下図)。



2. 2 cm から 100 m までの地震の研究

- ・ 地下 3km の堅固な岩盤中で 2cm サイズの多数の破壊が厚み 30cm さしわたし 30m の面に並び、そこを起点に 100m が滑る地震が起きた。地震 1 週間前は活動が加速した。

今後の課題、ターゲット、夢！

- ・ 現実的な熱水条件、断層サイズでの摩擦の物理ベースモデルを作る。
- ・ 観測事実として統計的に疑えない前兆現象を同定して、ハゲタカでない査読に通るくらいに受け入れられやすいメカニズムを提案する。



准教授 今西祐一

研究の概要

重力の精密観測により、地球の表層や内部で起きているさまざまな変化・運動を調べています。

メンバー：西山竜一助教

Tel: 03-5841-5721

E-mail: imanishi@eri.u-tokyo.ac.jp

居室：地震研究所 2号館215号室

重力のもと物質が及ぼす万有引力ですから、重力加速度の変化を測るということは、密度分布の変化をモニターするという事です。私たちは、絶対重力計や超伝導重力計を用いて、きわめて精密な重力測定／観測を行い、地下の質量移動や密度分布の変化にかかわる現象を調べています。フィールドは、北海道から沖縄まで、日本全国に及びます。

1. 松代（長野県）における超伝導重力計観測

超伝導の磁気浮上を利用したきわめて高感度の重力計

感度は1G（地上の重力加速度）の1兆分の1

感度が高いということは、より遠くの微小な現象が見えるということ…これで地球の核の振動にせまります



2. 絶対重力計による測定

重力加速度を9ケタの精度で測定可能

地殻変動やマグマの活動をモニターします



弟子屈（北海道）にて

3. 石垣島（沖縄県）における重力観測

八重山諸島の地下で起きているスロースリップに関する重力変化を調べています





教授 綿田 辰吾



助教 三反畑 修

研究の概要

綿田研究室では、地震・火山・津波を含む広範な固体地球現象を研究対象とし、人工衛星・陸上観測・海底観測など多岐にわたる観測機器で計測される**未知の地球科学的現象**を、理論や数値計算を用いて、基本原理から解き明かすことを目指しています。

研究室メンバー

教授：綿田 辰吾（固体地球・海洋・大気中の波動現象）
 助教：三反畑 修（火山性地震・津波の解析/数値計算）
 大学院生：石島 清宏（D2）工藤 蒼生・横瀬 藤恒（M1）
 海外インターンシップ学生：
 Zhu Yifan (China), Li Ting (China)

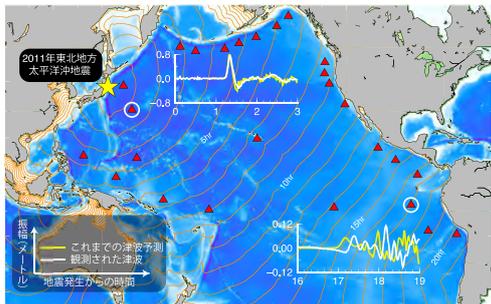
E-mail: watada@eri.u-tokyo.ac.jp

居室：地震研究所 1号館608号室

<https://sites.google.com/g.ecc.u-tokyo.ac.jp/watada-lab>

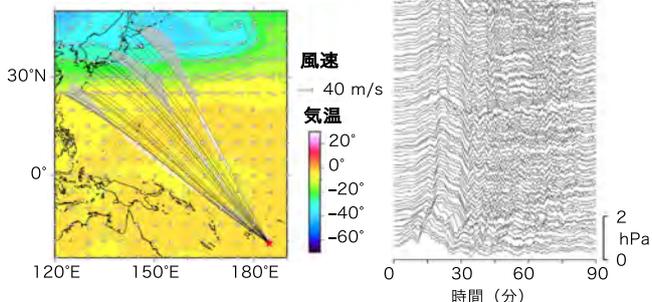
研究例①：地球と津波の相互作用

2011年東北沖地震による津波は、地球の反対側の南米大陸の沖合・沿岸でも観測されました。当時の知見では、到達時間を正確に予測できませんでした。津波が運ぶ海水の重さによって地球が変形するために、津波が進む速さが低下することを理論・数値計算と観測記録から証明し、津波予測の高精度化を実現しました。



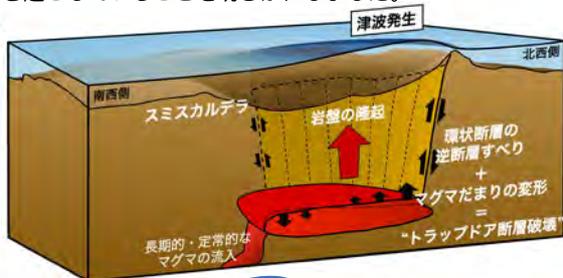
研究例②：トンガ噴火起源の津波と気圧波

2022年トンガ海底火山の大規模噴火後に、高速に伝播する津波と、特定の周期を持った長周期地震波が観測されました。噴火起源の大気波動と津波と長周期地震波の間で、特定の周期・波長が一致したことによって、大地と海洋と大気の共鳴現象が発生していたことを示しました。



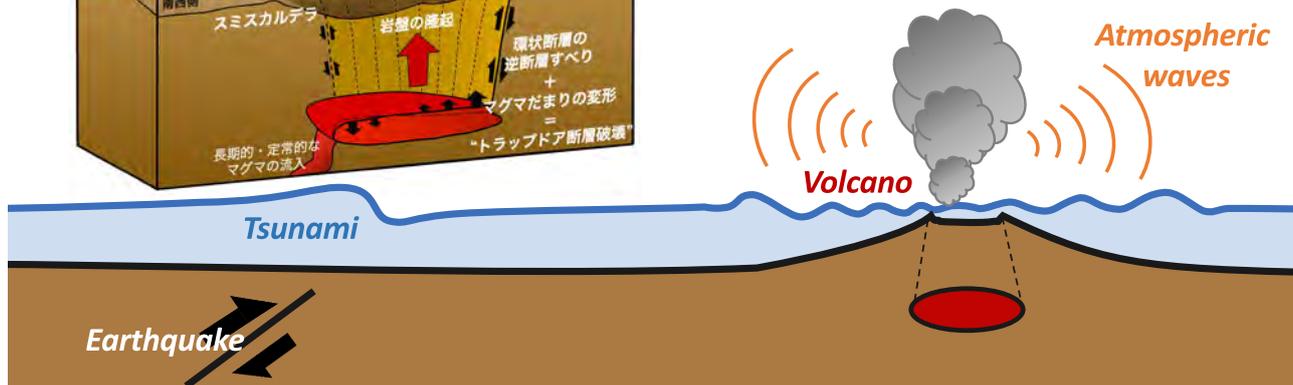
研究例③：海底カルデラで発生する奇妙な津波

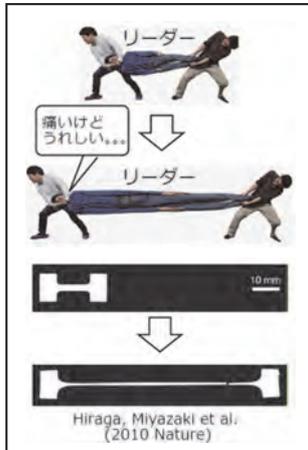
東京から約480km南方に位置する海底カルデラ火山では、10年に一度、大きな地震を伴わずに、波高約1mの津波が繰り返し発生しています。津波と地震波記録の解析によって、カルデラ火山の急激な隆起現象が津波を引き起こしていることを明らかにしました。



「観測データから未知の現象を発見したい！」
 「新たな理論が予測する現象を探求したい！」
 「物理と数学を駆使して地球を理解したい！」

そんな学生さんを歓迎します！





研究の概要

地球内部レオロジー、岩石微細構造形成

メンバー

平賀岳彦、小泉早苗 (PD)、姜 勝皓 (D1)、火原諒子 (M2)、吉松彩 (M2)、高田翔向 (M1)

Tel: 03-5841-5735

E-mail: hiraga@eri.u-tokyo.ac.jp

居室: 地震研究所 2 号館 413 号室

<https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/hiragalab/index.html>

世界唯一無二の石を作り、地球内部のダイナミックな現象を実験室で再現する 平賀研究室

千万年～億年スケールで生じる地球内部現象を数時間の室内実験で再現してしまう岩石を自ら開発しています(下図)。地震研究の岩石は現在、国内外の多くの研究グループが実験に用いるようになっています。鉱物はそのままだに粒子の大きさを極限に小さくすることで、岩石内部で生じるミクロな現象が映写機のフィルム回転を超速化するがごとく進むのが特徴です。上の写真にあるように、地球内部では1千万年以上かかるようなマントル岩石の「伸び」も半日の実験で達成できてしまいます。このメリットを最大に生かして、下部地殻から下部マントルまでの地球内部流動現象の解明に特に焦点をあてて研究を行っています。



我々は、最近 *Superplastic Earth Hypothesis* (地球内部超塑性仮説) を提唱し、その検証を様々な角度から進めています。それは、上にあるような「伸びる」現象(超塑性)を司るミクロな素過程が地球内部流動を支配しているという考えです。10年前に世界で初めて超塑性を実証したのですが、当時我々は、超塑性は地球内部でも局所的現象と考えていました。しかし、教官の意思とは別に、学生はどん

どんそれを裏切る結果を出し転向を余儀なくされます。まず、超塑性中に鉱物が並ぶことを見つけました(Miyazaki et al. 2013 Nature)。観測されるマントル内の地震波速度異方性の理由が説明されました。並ぶのに必要な粒子回転の直接観察に成功し(Maruyama & Hiraga 2017 JGR)、さらには上部マントルの粘性率が超塑性で極めてよく再現されることまで分かってきました(Nakakoji & Hiraga 2018 JGR; Yabe et al. 2020 JGR)。超塑性と粒成長が実はミクロなプロセスでは共通であることを見出し、全マントル粘性率を粒径の変化から精度よく求める研究にも着手しています。詳しくは研究室 HP で。

マグマ学

安田 敦



教授 安田 敦

・研究の概要

物質科学的手法（機器分析，実験）による火山噴火現象の理解と噴火の推移予測

・メンバー

<大学院生> 佐藤月彦（M2）

<サポートスタッフ>

外西奈津美（技術専門職員），今野紗世（技術補佐員）

Tel: 03-5841-5750

E-mail: yasuda@eri.u-tokyo.ac.jp

居室：地震研究所 2号館 412号室

<https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/yasuda/>

火山噴出物は噴火をもたらしたマグマの状態（組成，温度，滞留深度等）や運動を記録しています。とはいえ，一つの噴火の火山灰層の中にも様々な状態を記録した粒子が混在しており，データの解釈は容易ではありません。地質・岩石学的手法の持つ「時間軸を過去に広げられる」という長所を活かすためには，「不均質なデータ」の解析技術をもっと高めて，火山噴出物から過去の噴火をできるだけ正確に再現できるようにする必要があります。そうした技術開発が研究のメインテーマです。現在の火山の状態が過去の火山活動とどのようにつながっているのかを理解し，それをもとに火山活動の未来を予測することを目指しています。現在，以下のようなテーマで研究を行っています。

1. 火山噴出物分析による噴火事象分岐予測手法の開発
2. 類似した火山噴出物を識別・対比するための手法開発
3. 富士山のマグマ溜りの時代変化と噴火予測

◎よく使う分析装置



真空顕微 FT-IR

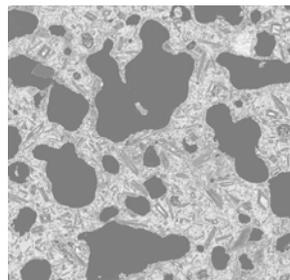
◎観察対象



斑晶累帯構造

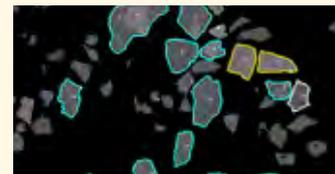
斑晶の形状，メルト包有物

石基組織



自動処理に興味がある方，歓迎

◎解析結果の例



組織の特徴に基づく自動分類



准教授 三浦弥生

研究の概要

- ・希ガス同位体組成（および揮発性元素組成）に基づく
大気や惑星の進化過程の解明
- ・小型観測装置の開発と応用

Tel: 03-5841-5761

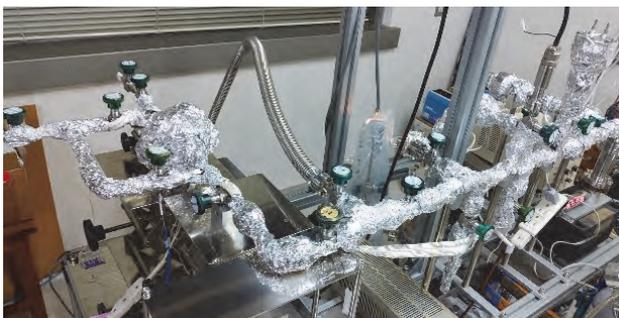
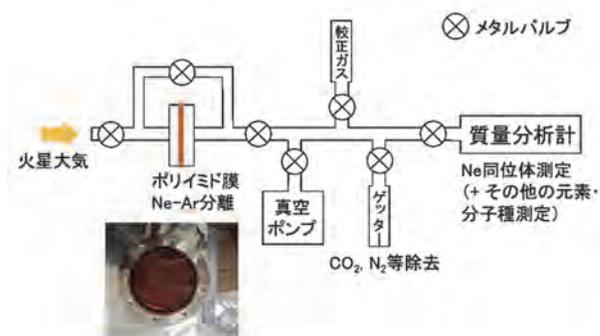
E-mail: yayoi@eri.u-tokyo.ac.jp

居室: 地震研究所 2号館 420号室

<https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/people/people000915.html>

1. 火星大気ネオンのその場測定に向けた手法開発

大気中のネオン存在度・同位体組成は、大気の進化過程を制約する上で有用な情報源です。火星表面でのその場測定を念頭に手法開発に取り組んでいます（惑星探査機への搭載を目指し、理学系研究科やJAXAの研究者と協力して進めています）。

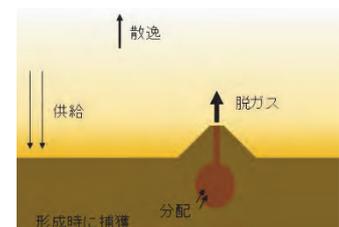


2. 希ガス同位体組成に基づく惑星大気進化過程の解明

希ガスは物理的プロセスにより元素組成・同位体組成が変化します。惑星間での違いから各惑星が辿った歴史にどのような違いがあるのか、惑星進化の本質を探りたいと考えています。

3. 地球や他惑星の内部（特にマントル）に存在する揮発性元素存在度の推定

火山活動などにより揮発性元素は惑星内部から大気へ供給されます。大気組成をもとに惑星内部の揮発性元素量の推定を試みています。



今後の取り組み

4. 火山性 He や Ne のその場測定により内部からの脱ガス量やその時間変化を観測することに興味を持っています。

地震波動学

古村 孝志



教授 古村孝志

研究の概要： 日本と世界の地震観測データを用いて、地震波の伝播特性の解析から地殻・マントルの不均質構造を推定し、高速計算機を用いた地震波伝播を再現・予測から、大地震の災害予測に向けた研究を進めています。

キーワード： 地震波解析、数値シミュレーション、データ同化、長周期地震動、深発地震・異常震域、即時予測・緊急地震速報、防災・災害情報

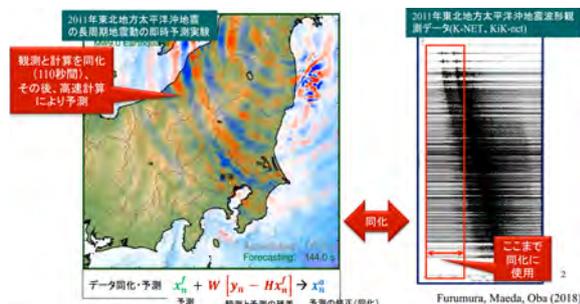
E-mail: furumura@eri.u-tokyo.ac.jp

居室：地震研究所 1号館 503号室

<https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/furumura/>

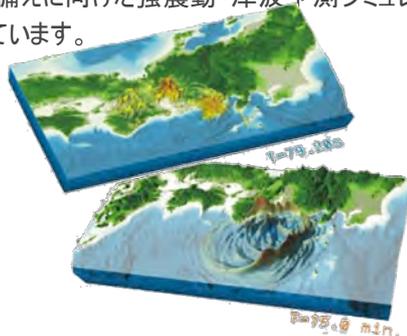
【研究紹介①】 観測・計算データ同化による長周期地震動のリアルタイム予測

高密度の地震観測網データと、地震波伝播シミュレーション結果を同化し、スパコンによる高速計算により、遠地の平野での長周期地震動の発生をいち早く予測する研究を進めています。



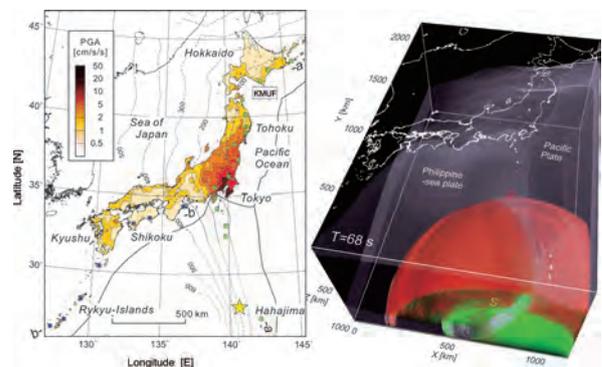
【研究紹介③】 南海トラフ地震の強震動予測

過去の南海トラフ巨大地震の強い揺れと津波を分析して巨大地震の震源過程を明らかにし、そして将来の巨大地震への備えに向けた強震動・津波予測シミュレーションを進めています。



【研究紹介②】 深発地震と異常震域の生成

深発地震の揺れは、堅いプレート内部を伝わる結果、特異な震度分布(異常震域)を作ります。地震波形を解析し、地震波伝播シミュレーションを行って、プレート内の不均質構造を推定し、海嶺で生まれて海溝に沈み込む海洋プレートの生成過程を調べています。



【古村研へのお誘い】

○ 地震波動現象に関心があり、地震波形データ解析、弾性波動論、数値シミュレーション等を道具として、科学の真理探究に意欲を持つ人を歓迎します。

○ 修士、博士課程での地震研究を通じて、大地震の強い揺れの成因を探り、地震災害の軽減に貢献する意思を有する人を歓迎します。

耐震工学 楠 浩一



研究の概要

建物の構造安全性に関する研究を行っています。その内容は、鉄筋コンクリート構造を中心に、振動台実験や建物の共振観測を行っています。

Tel: 03-5841-1760

E-mail: kusunoki@eri.u-tokyo.ac.jp

居室: 地震研究所 1号館 402号室

<https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/KUSUNOKI-LAB/>



教授 楠 浩一

代表的な研究テーマを2つ、下記に紹介します。

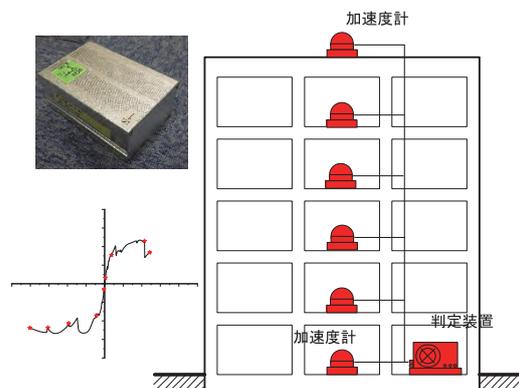
1. 大型振動台実験

世界で一番大きな振動台である E-Defense (兵庫県) を用いて、実大建物の振動台実験を実施しています。研究室みんなで神戸に泊まり込みです。大きな建物が揺れて壊れていくのは圧巻です。



2. 構造ヘルスマonitoring技術

建物にいくつかの加速度計を設置して、地震時の揺れを計測し、その計測値を用いて建物の被害を自動的に素早く判断する装置の開発と、実建物への設置を進めています。



建築構造分野の研究は一人ではできません。みんなで楽しく研究活動しましょう！楽(らく)と楽(たの)しくは大分違います。楽しくするためには時には楽でないこともあります！



准教授 毎田悠承

研究の概要

建築構造物の耐震安全性に関する研究を行っています。鉄筋コンクリート構造を中心に、コンクリート系複合構造物全般の耐震安全性、損傷制御に関する研究を行っています。

Tel: 03-5841-4844

E-mail: maida@eri.u-tokyo.ac.jp

居室: 地震研究所 1号館 502号室

<https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/KUSUNOKI-LAB/index.html>

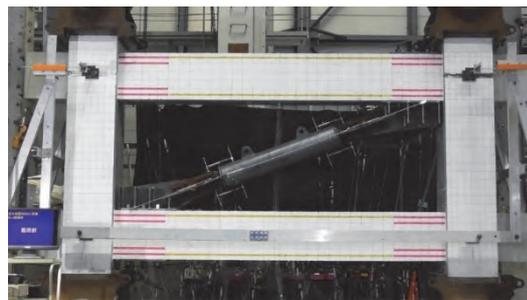
研究テーマは多岐にわたりますが、代表的な2つのテーマを以下に紹介します。

1. 制振ダンパーを活用したコンクリート系構造物の力学挙動

制振ダンパーをコンクリート系構造物に合理的に活用して、地震時の構造物の応答低減、損傷抑制を実現するための研究を構造実験と数値解析により行っています。

2. 付着を除去した鉄筋コンクリート部材の力学挙動

鉄筋コンクリート部材において、主筋とコンクリートの付着を部分的に除去することで、ひび割れを集中させ、修復性能を向上させる研究を行っています。実大スケールの部材実験や解析により検討しています。



強震動地震学

三宅 弘恵



教授 三宅弘恵

研究の概要

- ・強震動や地震災害に関する研究（地震学・地震工学）
- ・震源断層の破壊過程の探求
- ・強震動予測手法の開発
- ・地震ハザードリスク評価

Tel: 03-5841-5784

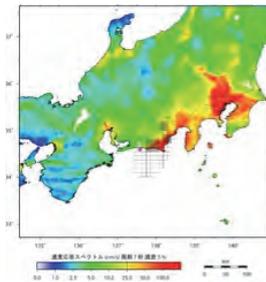
E-mail: hiroe@eri.u-tokyo.ac.jp

居室：地震研究所 1号館 505号室

<https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/people/hiroe/>

1. 地震の揺れを予測する

予測科学を駆使したシミュレーションによる地震の揺れの予測は、地震災害予防の有効な方法です。今いる場所や自宅の地震の揺れを予測するのです。シミュレーションを行うには、断層の破壊や地下の構造など、科学的な側面からモデル化を行う必要があります。その後、数値シミュレーションを行って揺れを予測し、災害情報を蓄えていきます。これらはハザード情報と呼ばれ、構造物や人的被害などのリスク算定の基礎となります。



2. 被害地震に学び、自然を計る

将来の地震の揺れを予測するには、自然を支配する法則を見つけることが重要で、ここに自然科学を探求する醍醐味があります。近年、多数の観測網が国内や海外、陸域や海域に張り巡らされ、地震の特徴や揺れの様子が分かるようになってきました。しかし、被害地震が起きるたびに、想像していなかった現象が起きることがあり、必要に応じて現地に臨時観測に出向き、その原因を理学的な側面から研究しています。



3. 大学院に進学希望の皆さんへ

大学院は、学部とは異なり、決まったカリキュラムに沿って学習するのではなく、独自の発想に基づき、道なき道を開拓して進むことが求められます。その時に皆さんの心の支えになるのは「自らの興味を冷静に鑑み、自分が進路を決めた」ということだと思います。悩み迷って、良い進路や研究室を選択してください。

観測地震発生学

加藤 愛太郎



教授 加藤 愛太郎

【研究の概要】:地震観測データを中心に据え、さまざまなアプローチを通じて、地震発生メカニズムの解明に取り組んでいます。

研究室のメンバー(2025年4月時点)

大学院生:大竹 和機(D3), 高橋 拓未(M2), 河野 葉子(M1), 関 涼太(M1)

特任研究員:Ji Zhang, Louise Maubant
学術専門職員:渡邊 倫子



協力教員 伊東 優治

これまでの受け入れ学生・研究員数:計 14 名

地震が発生する仕組みはとても複雑です。当研究室では、地震観測やデータ解析に基づいて地震発生過程の理解を深めるための研究を進めています。国内外で発生した大きな地震の前に観測された地震活動(前震活動)の解析や、DAS を含めた高密度・多点の地震観測網を展開して取得した大容量の地震波形データの解析等を行っています。例えば、地震活動の検出性能を向上させることで、2011年東北地方太平洋沖地震(M9.0)の発生前に、本震の震源近傍でスロー地震が発生していたことを捉え巨大地震の発生を促進した可能性を指摘しました(図1)。他にも、スロー地震に関する研究(図2)、余震・群発地震・誘発地震に関する研究、震源域の地下構造(流体の役割)に関する研究等、幅広い研究テーマに取り組んでいます。

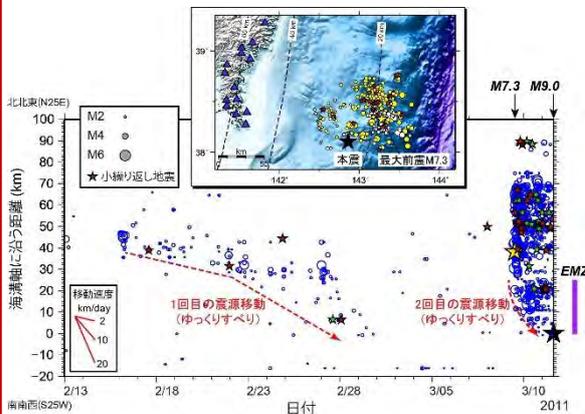


図1: 東北地方太平洋沖地震発生前の前震活動の時空間分布(青色の丸印)。黒色の星印:本震 M9.0 の震源, 黄色の星印: 最大前震 M7.3 の震源, 赤い星印:小繰り返し地震の震源。横軸は日付, 縦軸は海溝軸に沿う距離を示す。赤い破線は震源移動のフロントの位置を表す(after Kato et al. 2012)。

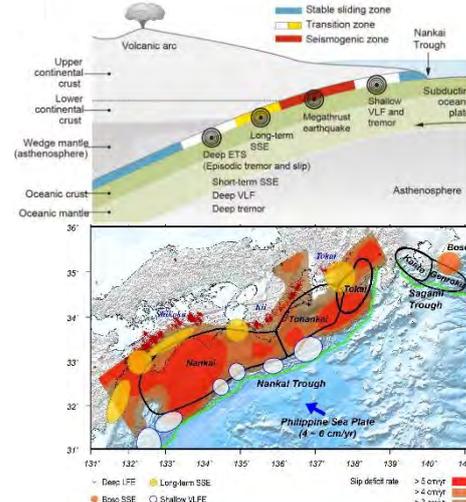


図2: スロー地震の分布(南海トラフ)。上図: 深さ断面図, 下図: 平面図 (After Obara & Kato, 2016; Kato 2019)。

地震に生起する様々な現象を多面的な観測研究により、地震発生過程の理解を深めるために研究を行っています。地球内部で進行する未知の地震現象を探索してみませんか? 興味のある方は、お気軽にご連絡下さい。研究室の見学や面談、大歓迎です。

E-mail: akato@eri.u-tokyo.ac.jp, 居室:地震研究所1号館6階609号室

HP: <https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/people/akato/>



かのう
加納

やすゆき
靖之

KANO, Yasuyuki
E-mail ykano@eri.u-tokyo.ac.jp
Twitter @KanoYasuyuki
Web www.eri.u-tokyo.ac.jp/people/ykano/

Earthquake Research Institute
地震研究所 歴史地震研究分野

地震や自然災害の研究をしています。
特に、歴史時代に発生した現象について調べています。
地震の不思議や歴史を研究してみませんか？

研究 地震学・歴史災害科学
所属 東京大学地震研究所・地震火山史料連携研究機構
居室 地震研究所一号館六〇七号室

研究内容 Current Research

1 過去の地震や自然災害に関する研究

歴史史料（わかしの人がかいたもの。文書や書簡、日記など）の記述にもとづいて、過去の地震や自然災害について調べる研究をしています。地震などの自然現象について書かれた内容を丁寧に解釈し、観察日時や場所を特定します。地震であれば、震度などの地震学で扱うことのできる量に換算して、現代の地震学の知識をもとに分析します。



【地震考】(国立公文書館所蔵)

2 地震と地下水に関する研究

大地震が起こる際にたびたび観測・観察される地下水の変動が、どのようなメカニズムで起こるのかに興味をもっています。

3 みんなで翻刻とオープンサイエンス

「みんなで翻刻」という市民参加型のオンライン史料解読プロジェクトに携わっていて、オープンサイエンスやシチズンサイエンスに興味をもっています。 <https://honkoku.org/>

4 地震火山史料連携研究機構

この機構は部局を越えた連携のために設置されました。史料編纂所の研究者(日本史学や人文情報学)と連携して過去の地震や火山噴火に関する研究を進めています。

5 「歴史学 × 地球惑星科学」

文理を問わず、さまざまな研究分野の方との共同研究や、その基盤づくりをしています。日本地球惑星科学連合大会で同名のセッションを企画しています。

これまでの研究 Selected Works



1854年伊賀上野地震の際の伏見での局所的な液状化



地震の年表をもっと正確に精密に



東北地方太平洋沖地震による浅部地殻の透水性の変化



地震の際に発生する断層摩擦熱の検出

背景画像：『普光寺地震摺写』（東京大学総合図書館 石本コレクション）を改変

海域地震学 望月 公廣



教授 望月 公廣

研究の概要

プレート境界で発生する巨大地震からスロースリップまで、多様な断層すべりの発生環境について、海域から陸域まで連続的に追跡することによって、その発生メカニズムを解明する。

協力メンバー：仲田理映（助教），悪原岳（助教）

Tel: 03-5841-5715

E-mail: kimi@eri.u-tokyo.ac.jp

居室：地震研究所 1号館 506号室

日本海溝に沈み込む太平洋プレートの海底は、三陸沖で平坦、茨城沖で凸凹に富んでいます。

2011年東北沖地震は、平坦な海底が沈み込んでいる三陸沖で発生しました。一方、凹凸に富む海底が沈み込む茨城県沖では、M7級大地震が繰り返し発生し、さらに超低周波地震や、海溝軸近傍では微動が発生するなど、多様な断層すべりが発生しています。

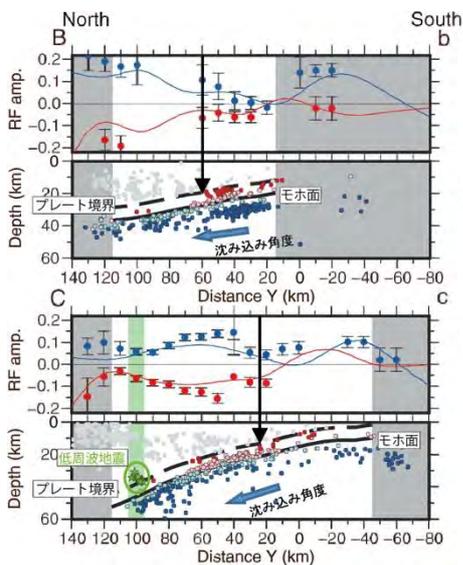
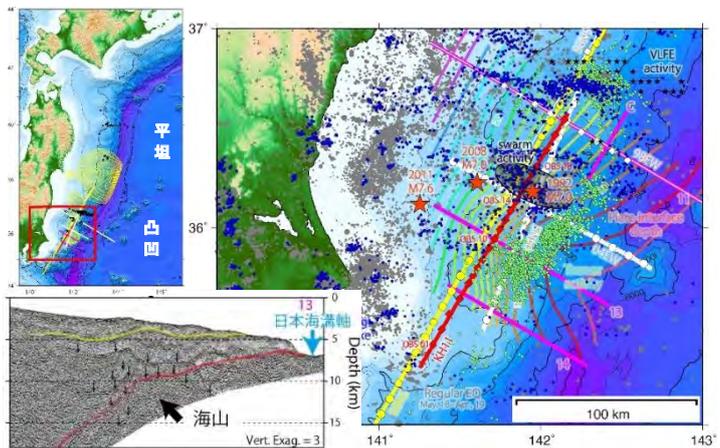
プレート境界の形状が断層すべりの性質を決める一因と考えられます。

左上：黄－東北沖地震断層すべり分布

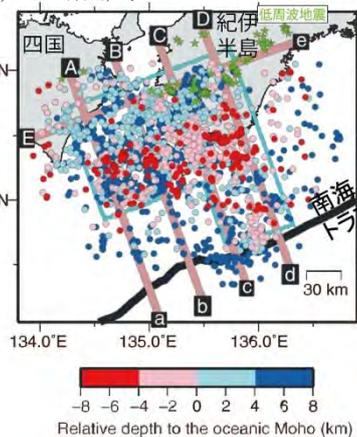
左下：地震波反射断面図

右：実線は、人工震源構造調査の測線

赤－M7級地震、青－群発地震、緑－微動



海底地震計によって精度よく決定された紀伊半島一四国東部沖の震源分布（下）とプレート境界およびモホ面での地震波構造変化の大きさ（左：Bb, Cc断面）。



南海トラフに沈み込むフィリピン海プレートの深さは、紀伊半島下で大きく変化しています（左図：黒破線）。プレート境界周辺における流体の分布などに起因する地震波速度の変化と、地震活動の深さとの関係を海域から陸域まで追跡して調べることによって、断層すべりの特徴を決定する要因の解明を目指しています。



准教授 福田淳一

研究の概要

GNSS などの測地観測データと断層運動・地球変形の数値モデルを用いて、地震サイクルに関係した地殻変動や断層運動を明らかにし、それらのメカニズムを解明することを目的とした研究を行っています。また、このような研究に必要な地殻変動のモデル化手法の開発にも取り組んでいます。

Tel: 03-5841-0505

E-mail: jfukuda@eri.u-tokyo.ac.jp

居室: 地震研究所 1号館 409号室

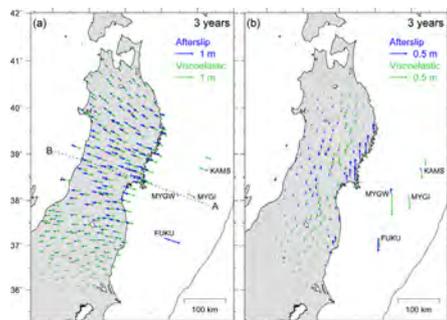
<https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/people/people000877.html>

1. 地震サイクルに関係した地殻変動のモデル化

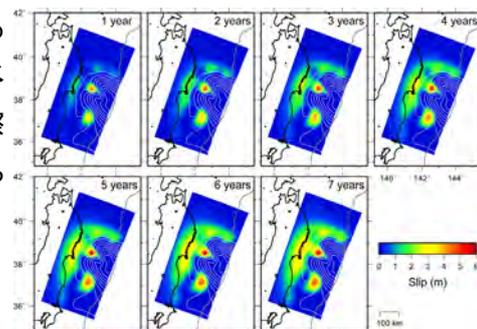
地震前の断層の固着、地震時の高速な断層すべり、地震後の低速すべり(余効すべり)という一連の断層の固着・すべり(地震サイクル)は粘弾性的なアセノスフェアと相互作用しながら地球の変形を引き起こし、GNSS などの測地的な手段により地殻変動として観測されます。地震サイクルの理解を深めるために、断層の固着・すべりと粘弾性緩和を組み合わせたモデルを用いて測地データをモデル化する手法を開発し、巨大地震前後の断層の固着・すべり、粘弾性変形の地殻変動への寄与、断層の摩擦特性、アセノスフェアの粘弾性レオロジーなどを明らかにする研究を行っています。

2. 地殻変動のモデル化手法の開発

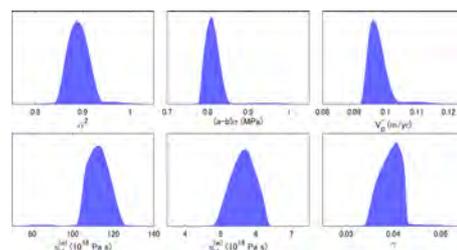
上記の研究を進めるためには、複雑な数値モデルのパラメータを観測データから推定することが必要となります。このための手法の開発をベイズ統計やデータ同化の理論に基づいて行っています。この他、断層すべりや地殻変動の時空間変化を測地データから推定する手法の開発を行っています。



2011年東北沖地震後3年間の余効すべりと粘弾性緩和による地殻変動



2011年東北沖地震後7年間の余効すべりの時間発展



測地データを用いた数値モデルのパラメータ推定



メンバー

市原美恵（教授）

大学院生：堀内拓朗（M2）・中尾俊介（M1）・Victoria Hipatia Olivera Craig（M1）

研究員：村松弾・柘植鮎太・Natalia Galina

外来研究員：桑野修（JAMSTEC）・小林宰（気象庁）・武尾実（名誉教授）

火山の噴火ダイナミクスと音（空振）の研究

特徴：三位一体のアプローチ

- ・ 自然現象の観察（観察・調査）
- ・ 室内実験
- ・ 理論・計算



Room : ERI 2-503

E-mail: ichihara@eri.u-tokyo.ac.jp

<https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/ichihalab/>

実施中の研究課題

空振の研究

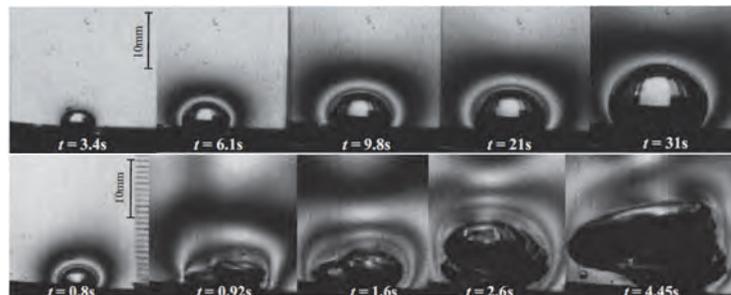
大気中を伝わる低周波の音波を「空振」と呼びます。空振を検出し、発生源の方向を決める新しい方法を開発し、フィールドで実験しています。空振観測データの解析と、室内実験を合わせて、火山噴火や雪崩のダイナミクスの理解を目指しています。



Stromboli 火山（イタリア）での実験

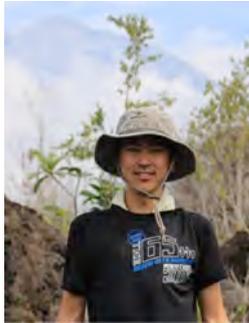
マグマの流動から破壊への遷移メカニズムの研究

流動から破壊への遷移は、地球科学や工学の多くの現象に関係します。国内外の機械工学とソフトマター物理学分野の研究者と一緒に、実験・理論・数値計算を組み合わせることで研究しています。アウトリーチのためのモデル実験の開発も行っています。



粘弾性流体中の気泡の粘性的膨張や脆性破壊の様子。

自分で研究テーマを見つけたい人、歓迎します！



研究の概要

- 火山噴火に伴う地表面象(噴煙/火砕流/溶岩流など), マグマ上昇のダイナミクス, マグマの蓄積場に関する研究
- 噴出物・堆積物の形成過程, 堆積物に基づく噴火履歴解明
- 超巨大噴火の推移とインパクト, 海域火山に関する研究

研究室メンバー

前野 深(准教授), 川口允孝(助教), 安田裕紀(研究員), 水野 樹(D3)
 関子田和典(D3), 春田悠祐(D2), 飯澤彩羽(M1), 鈴木慈苗(M1)

居室: 地震研究所 2号館 505号室

Tel: 03-5841-4779; E-mail: fmaeno@eri.u-tokyo.ac.jp

URL: <https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/fmaeno/>



火山噴出物や堆積物から得られる地質・物質情報(様々な空間スケールの構造や組織, 形状, 化学組成など)をもとに, 噴火に伴う地表面象やマグマ上昇のダイナミクス, 噴火履歴やマグマ蓄積場の変遷を明らかにし, 火山と噴火現象の理解を深めようとしています。フィールド調査, 室内での物理化学分析, 画像・数値解析などいくつかの手法を組み合わせることで研究を進めています。



噴火現象の観察, 噴火堆積物のフィールド調査, 層序・堆積構造の解析



構成物・粒子物性の解析, 岩石微細構造・鉱物組成・組織の分析

TOPIC 1 近年の国内外の火山噴火では, 堆積物データをもとに噴火様式や推移を明らかにし, 噴火を特徴付ける物理パラメータ(マグマの噴出量や噴出率)を解明してきました。堆積物の保存が良く, 文献記録が残されている歴史時代の噴火についても, 噴火プロセスやマグマ供給系の復元を進めています。

TOPIC 2 現代社会が経験したことのないような規模の噴火, (超)巨大噴火も研究しています。7300年前に南九州で起きた鬼界アカホヤ噴火は, 縄文文化や自然環境に甚大な影響を及ぼしたとされていますが, 前駆現象や噴火の時間スケールなど未解決の問題が残されており, 堆積物の解析が鍵となります。



准教授 行竹洋平

研究の概要

主に地震観測データを用いて、火山内部の地殻構造の推定や、火山やその周辺部で発生する地震の発生過程メカニズムの解明を進めています。さらに地震観測データを基に地下内部の情報を取り出すことを目指した研究も進めています。

Tel: 03-5841-1854

E-mail: yukutake@eri.u-tokyo.ac.jp

居室: 地震研究所 2号館 506号室

■ 研究紹介

1. 火山内部構造の推定を目指した観測研究

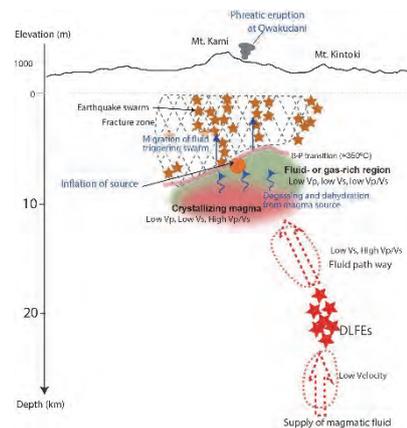
火山の下にはマグマ溜まりがあり、マグマ本体やそこからの熱水などの供給により、様々な変動現象が起きています。この研究では地震観測データを最大限に活用し火山下のマグマ溜まりの構造や火山性地震の発生原因の解明を進めています。

2. 火山マグマ供給過程の研究

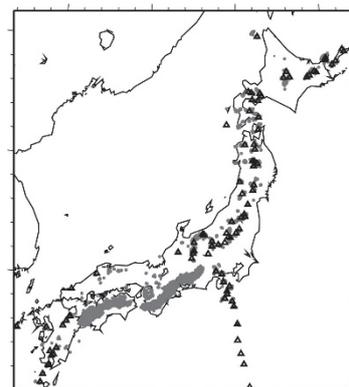
マグマが地下深部から火山浅部にどのように上昇してくるのか、そのプロセスは未解明な点が多いです。この研究では火山深部深さ 30~20km 付近で発生する低周波地震や、さらに浅部で起きる火山構造性地震、低周波地震、微動の発生メカニズムの理解を通し、マグマ性流体の供給プロセス及び火山活動との関係性の理解を目指しています。

3. 火山モニタリング手法の開発

火山で観測された観測データから地下内部で何が起こっているのかどういった状態にあるのかをできるだけ即時に把握する手法の開発を、地動ノイズ、地震活動などのデータを用いて様々なアプローチから進めます。



箱根火山のマグマ供給モデル



日本列島で発生する低周波地震



教授 清水 久芳

研究の概要：私たちは電磁気的手法を用いて、マントルダイナミクスや、マントル-核システムのダイナミクスを解明し、地球や惑星の進化を理解することを目的とした「観測的研究」を主に行っています。

メンバー：清水久芳、原田雄司（外来研究員、マカオ大学）
+ 地球電磁気関連教員

連絡先：

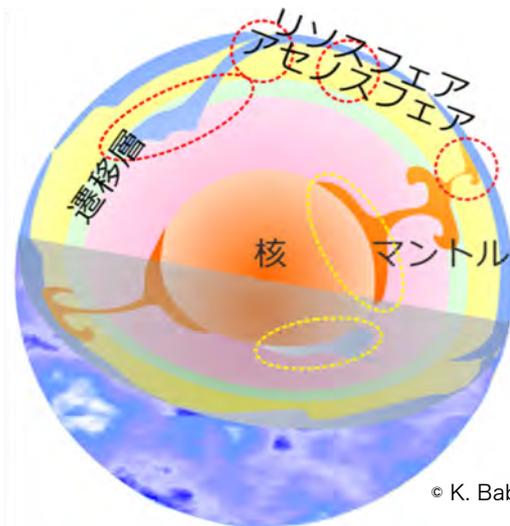
電話: 03-5841-5748

email: shimizu@eri.u-tokyo.ac.jp

居室：地震研究所 1号館704号室

テーマ1. マントル遷移層の電気伝導度構造からマントルダイナミクスと地球の進化

マントルを構成する岩石の電気伝導度は、その中に含まれる水の量に大きく左右されます。「現在のマントル遷移層に含まれる水の量」をキーワードとして、マントル対流の様式やプレートテクトニクスの始動・発達等を考察し、全マントルのダイナミクスと進化を理解することを目指しています。このために必要な新たな観測、データ解析・解析手法の開発に取り組んでいます。



テーマ2. マントル深部構造とマントル-核システムのダイナミクス

マントルダイナミクスを理解するためには、より深部の情報も必要です。また、マントルと核は様々な相互作用をしながら進化してきました。マントル最下部が非常に複雑な構造をもつことは知られていますが、電磁気学的な構造は未だによくわかっていません。長期間に渡る地磁気と地球電場変動の観測からこの電磁気学的構造を解明し、また、マントル-核の結合したシステムとして捉えることにより、マントルとマントル-核システムのダイナミクスのさらなる理解を目指しています。

テーマ3. 地磁気変動の予測と地球内部ダイナミクス

データ同化を手法を用いて、地磁気の数年スケールの変動予測を試みています。地磁気は様々な時間スケールで変化していますが、それらの変化の原因ははっきりとわかっていないことが多く、特に、一年スケールで変動する「地磁気ジャーク」は、未だ謎にまつまれています。地磁気生成モデルでこの地磁気ジャークがどの程度再現/予測できるのか、という観点から、原因となる核内部の変化を捉えることを目標の一つとしています。

テーマ4. 月や惑星の磁場観測と惑星・衛星の進化

惑星や月周辺の磁場を用いた、惑星・衛星内部構造や進化に関する研究も行っています。既存のデータの解析にとどまらず、新たなデータの取得に向けた観測の立案や機器開発にも携わっています。



教授 竹内 希

研究の概要

グローバル地震学とは、グローバルスケールの地震波伝播を利用して地球を調べる研究分野です。しかし対象とする問題の空間スケールに本質はなく、グローバルな視点を持って、フロンティアを開拓することを目指しています。新たな解析手法を開発し、これまで得られなかった種類の情報を抽出可能にすることにより、地震学の枠組を広げることを目標としています。

E-mail: takeuchi@eri.u-tokyo.ac.jp

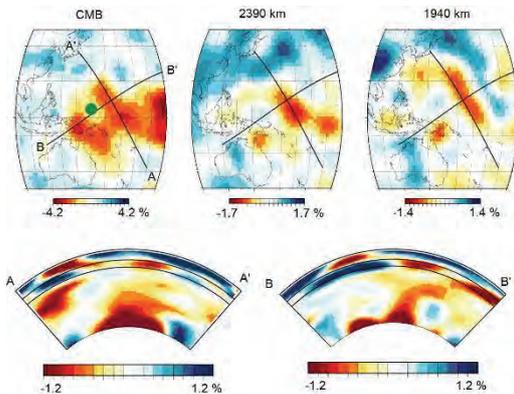
居室：地震研究所 1号館 706号室

<https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/takeuchi/>



1. 新たな解析手法の構築

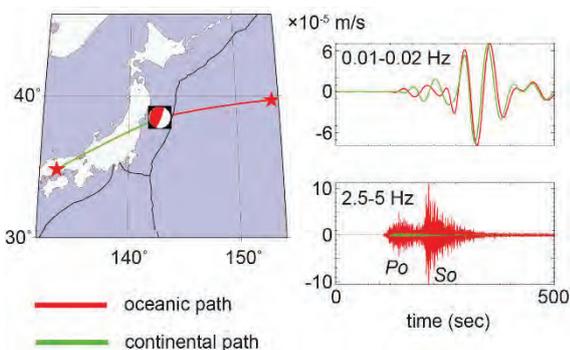
新たな解析手法を開発することにより、これまでできなかった解析が可能になります。これは地球を覗く新たな窓を作ることに相当します。モノづくりは頭の中でも行われることを認識して頂きたいと思います。



開発した効率的な理論波形計算手法を用いて推定された太平洋下の下部マントル構造。これまで使われてこなかった後続波も活用可能になり、低速度異常の詳細な形状を明らかにしました。

2. 新たな窓から覗く地球の内部

新たな観測データや解析手法を用いて地震波形を解析すると、地球内部構造の新たな知見を得ることができます。これまで得られなかった種類のパラメータを決定できれば、新たな地球科学を展開できるはずです。



海底地震計で取得された長周期波形(右上赤)と短周期波形(右下赤)。複雑な短周期波形を解析する手法を開発し、減衰構造の周波数依存性を明らかにしました。リソスフェア・アセノスフェアの成因を制約し、プレートテクトニクスのしくみにせまりました。

メンバー

竹内 希 (教授)
 山谷里奈 (助教)
 原口 悟 (特任研究員)
 青山哲也 (D1), Tianxu Wang (M1)

海底電磁気学

馬場 聖至



ばばきよし
准教授 馬場 聖至
海半球観測研究センター

電磁気学的観測手法を用いて、地球内部構造とマントルダイナミクスに関する研究をしています。
フィールドは、**世界の海** です！

研究員 : 多田訓子(外来研究員・JAMSTEC)
: 松野哲男(外来研究員・神戸大学)
: 姜峰(外来研究員・中国科学院南海海洋研究所)

大学院生: 唐旭(特別研修生・中南大学)

居室 : 地震研究所 1号館 707号室

Tel : 03-5841-5764

E-mail : kbaba@eri.u-tokyok.ac.jp

HP : <https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/people/kbaba/>



主な研究成果

海洋プレートの沈み込みと背弧海盆マントルへの水の供給を議論

古い海洋マントル構造の年代に対する不規則性を発見

中央海嶺下マントルの部分熔融過程を実証

【観測対象】 中央海嶺・沈み込み帯・海洋性島弧・背弧海盆・ホットスポット・平坦深海盆・巨大海台など

マントル上昇流のイメージングに成功

海底電磁気観測研究とは？

天然自然の電磁場変動を海底で観測し、海底下の電気伝導度構造を推定します。マントルダイナミクスを左右する、温度、含水量、部分熔融量などを議論することができます。



海底電位磁力計の設置作業

現在推進中・計画中の主な研究テーマ

- 海洋リソスフェア・アセノスフェアの実態解明のための観測研究
 - マリアナ沖最古海盆(日韓・日台共同)
 - ハワイ・天皇海山列屈曲域(日独共同)
- 沈み込み帯のスロースリップと電気伝導度構造変化の観測研究(日・NZ共同)
- マントル遷移層電気伝導度イメージング手法の高度化

皆さんと一緒に考え、議論して、研究を大きく進展させられることを期待します！



准教授 一瀬 建日

研究の概要：海底から診る地球内部構造

海底に地震計を設置して、海域から地球内部構造と地球進化の解明を目指しています。

Tel: 03-5841-5800

E-mail: tisse@eri.u-tokyo.ac.jp

居室：地震研究所 1号館 705号室

<http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/people/tisse/>



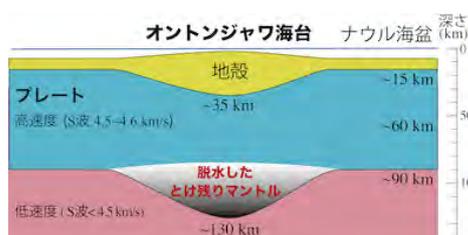
地震研究所で開発された広帯域海底地震計を用いて、国内外の研究者と協力して海底地震観測をしています。

現在、主に海底地震観測で得られた記録を使用して、表面波地震解析手法を用いて海洋プレートの構造解明を行なっています。観測記録には地球深部を伝播してきた地震波も含まれており、これらを用いた地球深部構造の解明も目指しています。

地球内部構造に興味のある方、一緒に研究してみませんか？

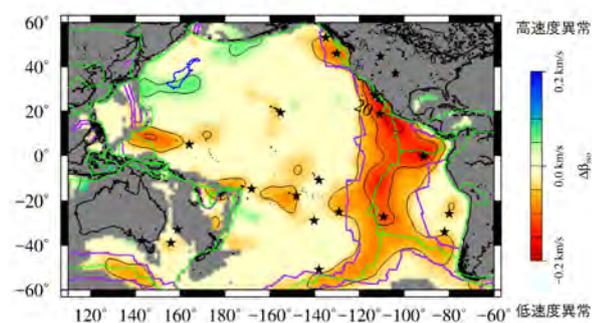
最近の研究成果

オントンジャワ海台の解明



太平洋南部にある世界最大の海底海台（オントンジャワ海台）とその周辺で海底地震観測を実施しました。そして海台の S 波速度構造を解析し、プレートの底が周囲より 40km 深いことを明らかにしました。また、この成因が熱組成プルームである事も明らかにしました。

プレート成長を考慮した太平洋の上部マントル構造解析



これまで日本・アメリカが実施した海底地震観測の記録と陸上地震観測記録を用いて太平洋の上部マントル S 波構造を詳細に求めました。そして、冷却によるプレート成長モデルから逸脱した異常領域の場所を明らかにしました（色の濃い部分が強い異常領域）。



教授 田中宏幸

研究の概要

火山や地球の内側を、素粒子を使って透視撮影する研究を進めています。

Tel: 03-5841-5789

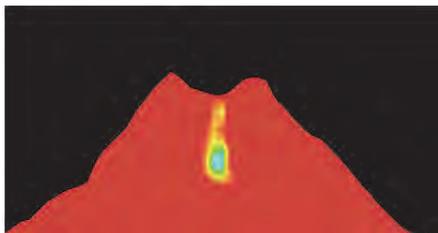
E-mail: ht@eri.u-tokyo.ac.jp

居室: 地震研究所 2号館 209号室

<https://www.muographix.u-tokyo.ac.jp>

宇宙に起因するミュオンの観測で火山のダイナミクスを解明

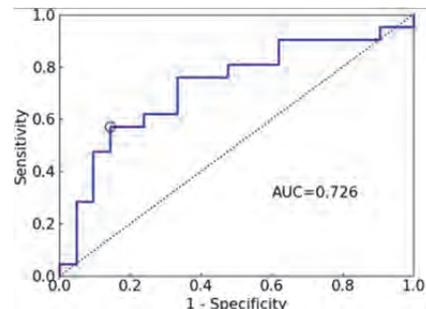
ミュオグラフィとは、一次宇宙線が地球大気に衝突することで大量に発生するミュオンという高エネルギーの素粒子を用いた透視撮影技術です。ミュオンは、数 km の岩盤さえ通り抜ける高い透過力を持っていますが、高密度の物質の中では、ひしめき合う原子に邪魔をされ、通過できるミュオンの個数が減ってしまいます。この性質を利用して、ミュオンの飛来した方向と数を検出することで、ちょうどレントゲン写真のよう



薩摩硫黄島で撮影されたミュオグラフィ画像。青色部分がバブルを多く含むマグマを示している。

に巨大物体内部の密度分布を調べる研究を進めています。

最近、医学部附属病院と共同研究を進めています。医療分野で成果が上がっている機械学習による人体の量子画像の自動診断技術を火山のミュオグラフィ画像に応用しました。その結果、桜島の直前7日間のミュオグラフィによる火山噴火予測の可能性を示しました。



桜島の活動的の火口近傍のミュオグラフィデータセットに対する ROC 曲線。(Nomura et al. Sci Rep. (2020))



研究室ウェブページ

<http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/cshpc/>

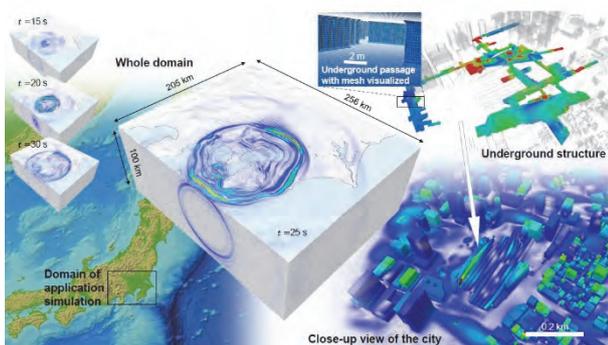
メンバー :

市村 強 教授 (ichimura@eri.u-tokyo.ac.jp, 03-5841- 5692, 3 号館 T42)Maddeggedara Lalith 准教授 (lalith@eri.u-tokyo.ac.jp, 03-5841- 5699, 3 号館 T43)藤田 航平 准教授 (fujita@eri.u-tokyo.ac.jp, 03-5841- 1763, 3 号館 T44)

本研究室では、固体地球科学・地震学・地震工学・社会基盤学に関連する問題を物理・社会経済の両面から解くための計算科学・高性能計算手法の開発・応用研究をしています。富岳や Frontier といった世界最速のスーパーコンピュータを活用できる最先端の計算科学研究を目指します。

1. 物理シミュレーション

世界最速のスーパーコンピュータを有効活用する高性能大規模有限要素ソルバーの研究開発を行っています。計算科学アプローチによる研究開発とともに、データ解析・AI ベースの手法を統合する手法を開発することで物理シミュレーションのさらなる高速化・高度化を進めています。



2. 社会・経済シミュレーション

地震後の住民避難や経済の高解像度シミュレーションを可能とする高性能マルチエージェントシミュレーション手法を開発しています。マルチエージェントシミュレーションを AI で高度化し、物理シミュレーションと統合することで、災害の発生から災害後までを一気通貫で分析することを目指します。



本研究室では、工学系研究科社会基盤学専攻(博士・修士課程/空間情報グループ)・工学部社会基盤学科(学部生/基盤技術と設計グループ)から学生を受け入れています。詳細は以下を参照ください。 http://www.civil.t.u-tokyo.ac.jp/graduate_school/

We accept Ph.D./Master course students from the Department of Civil Engineering, Graduate School of Engineering. Details are available from: <http://www.civil.t.u-tokyo.ac.jp/en/admission/>



准教授 長尾大道

研究の概要: 固体地球科学のための人工知能をはじめとする情報科学技術や数理的手法の研究をしています。応用数学、統計学、物理学が好きな人が集まっています。

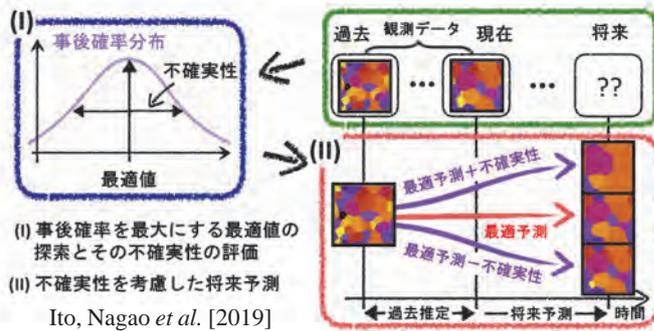
准教授 長尾大道, 助教 伊藤伸一, 特任助教 徳田智敏
特任研究員 Gerardo Mendo, 加藤慎也
大学院生 楠井俊朗(D1), 阿部祥太郎(M2)
学術専門職員 吉田美和

E-mail: nagaoh@eri.u-tokyo.ac.jp
居室: 地震研究所 3号館33号室
http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/nagaoh/

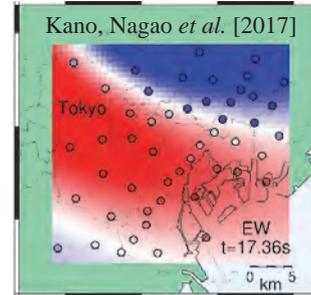


1. 地震研究のためのベイズ統計学的手法の開発

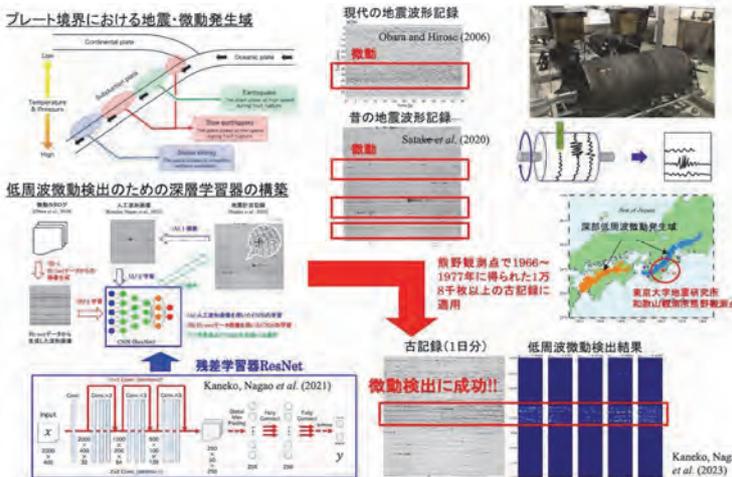
数値シミュレーションと観測データを融合する計算技術「データ同化」をはじめとする地震研究に役立つ様々なベイズ統計学的手法の基礎研究と応用研究を行っています。



不確実性評価が可能な4次元変分法データ同化手法の開発



レプリカ交換モンテカルロ法による地震波動場再構成



深層学習による地震計古記録からの低周波微動検出

2. 人工知能による地震研究情報科学の専門家との協働による人工知能を活用した地震研究プロジェクトを推進しています。特に、デジタル記録・画像記録中の地震連続波形からの地震波やスロー地震・低周波微動を検出するための深層学習モデルの開発に力を注いでいます。



教授 加藤尚之

研究の概要

岩石の摩擦構成則を用いた地震サイクルのシミュレーションなどにより、地震発生に至るまでの断層すべりの発展過程、動的破壊発生条件、地震サイクルの複雑さの原因などについて研究しています。

Tel: 03-5841-5812

E-mail: nkato@eri.u-tokyo.ac.jp

居室: 地震研究所 1号館 605号室

<https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/people/people000880.html>

断層面には摩擦力がはたらいており、ふだんは摩擦力により断層面は固着していますが、プレート運動などによる外力が摩擦力に打ち勝つと、断層が破壊されて地震が発生します。岩石実験などから摩擦力は断層のすべり速度や断層面の接触時間などに依存することがわかっており、この結果に基づき摩擦力を関数で表現したものを断層摩擦構成則といいます。断層にはたらく力を適切にモデル化し、断層摩擦構成則と組み合わせれば、断層すべりの時空間発展を数値的に解くことができます。

このような方法で断層の摩擦すべりの数値シミュレーションを行うと、地震発生に至るまでの詳細な断層のすべり過程を調べることができます。図1は地震発生直後から次の地震の発生直前までの断層面上のすべり速度の発展の様子を示しています。断層浅部では固着、深部では常に低速のすべりが発生していますが、低速のすべりは徐々に固着域内部に侵入します。この様子は破壊力学の基づき理論的に説明できます。シミュレーションの結果から地表での地殻変動も計算できる(図2)ので、観測と比較することによりプレート境界の摩擦特性を推定し、より正確な断層すべり過程のモデルを構築することを目指しています。

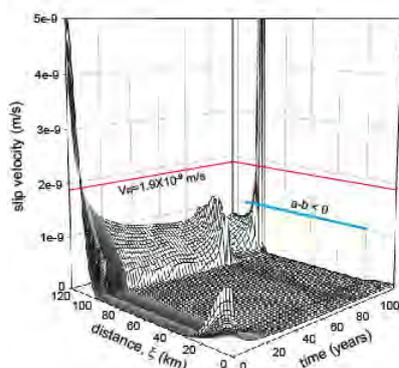


図1. 沈み込み域のプレート境界地震発生の数値シミュレーション結果。地震発生に至るまでの断層すべりの時空間発展を示す。すべり速度をプレート境界に沿って測った距離(地表は $\xi=0$)と前の地震からの経過時間の関数として示している。

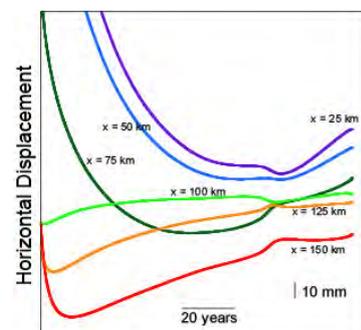


図2. 図1のシミュレーション結果から計算した地表での地殻変動。xは海溝軸からの距離。



教授 内田 直希

研究の概要

日本が位置する沈み込み帯を対象として、プレート構造・プレート境界周辺の地震活動・小繰り返し地震を用いたプレート境界すべりのモニタリング・地震の繰り返し特性などの問題に取り組んでいます。

Tel: 03-5841-8286

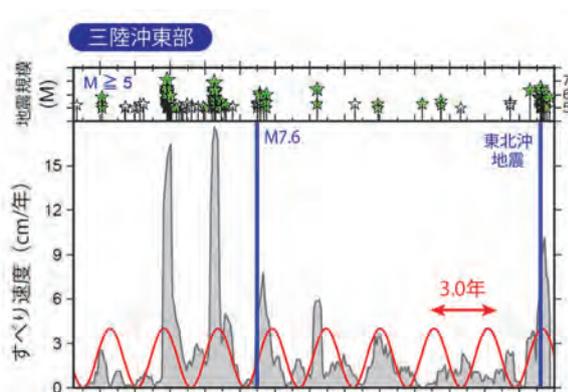
E-mail: uchida@eri.u-tokyo.ac.jp

居室: 地震研究所 1号館 508号室

https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/people/k0001_04289.html

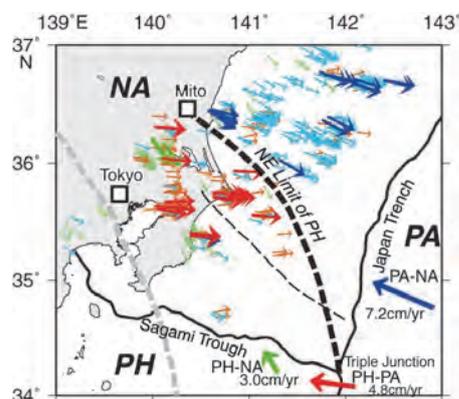
地震の予知・予測につながる可能性のある地震の準備過程や地震のメカニズムなどに興味を持ち、関係するわからないことを長年収集してきました。わからないことをきちんと覚えていると、時々何かの拍子に物事がつながって、(あるいは、つながりを確認する方法を思いつき)昔わからなかったこと・世界でだれも知らないことについて、正しいと思われる理解に辿り着くことがあります。あらかじめ決まった手法を突き詰めるというよりは、データを眺めつつ、その都度必要な知識や技術を学び、他の研究者の力も借りながら研究を行なっています。また、地震・火山に関するデータの有効利用や多分野の連携を目指した取り組みにも興味を持ち、データに基づくサイエンスが加速することを目指しています。私自身は、計算機を用いたデータ解析が割と得意ですが、興味を共有できる様々な得意分野を持った学生の方と共に研究を進めたいと思っています。ご興味がある方はぜひご連絡ください。

東北沖の周期的スロースリップ



繰り返し地震の時間変動と、セミナーで見せてもらった GPS データの変動が繋がって周期的スロースリップを発見した [Uchida et al., 2016, Science]

フィリピン海プレートの北東限



特徴的な震源分布と地震メカニズム解 (すべり方向) がつながってフィリピン海プレートの存在範囲が推定できた [Uchida et al., 2009, EPSL]



准教授 小山 崇夫

研究の概要

電磁気学的手法で、地球内部構造（比抵抗および磁化）や構造変化検出についての研究を行っています。

火山噴火現象を知るには地下のマグマや火山ガス・熱水を把握することが必須です。流体や熱異常に感度の高い電磁気学的手法は、火山観測に欠かせないツールです。

Tel: 03-5841-5726

E-mail: tkoyama@eri.u-tokyo.ac.jp

居室: 地震研究所 2号館507号室

<https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/tkoyama/>

ドローンを使って火山体構造解明

観測によって火山構造を知り尽くしたいが、危険地帯や地形状態で人力では到達不能な場所があり、観測の「空白域」が存在してしまいます。

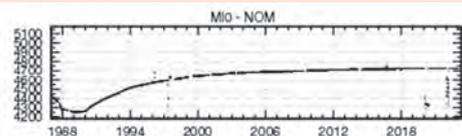
電磁場は、幸い空中ではポテンシャル場として扱えるため、空中での電磁気計測により地下内部構造を解析することを可能としてくれます。



我々はドローンを「観測ロボット」として活用することで、火山上空のあらゆる場所で電磁場を計測し、火山体構造の解明を行っています。

電磁気観測で伊豆大島火山モニタリング

伊豆大島は前回1986年噴火から38年以上経過し、遠くない将来に再び噴火活動するものとみられています。地震や地殻変動などの観測に加え、我々は電磁気観測でも火山活動モニタリングをおこない、噴火準備過程の解明を進め



上の図は伊豆大島火山の火口近傍の地磁気観測点で測定された前回噴火時以降の時系列データです。

帯磁傾向がほぼ収束していることがわかります、今後これが次の噴火活動に向けて熱消磁傾向になるかどうかモニタリングを続けています。

火山に興味のある方、是非お越しください！



教授 酒井慎一

観測開発研究センター 酒井慎一 教授
(情報学環・学際情報学府 総合防災情報センター)
地震研究所1号館507号室 03-5841-5745
coco@eri.u-tokyo.ac.jp

これまでは、地震現象に対して地震計で観測を行い、どんなところで地震が起きるのか、今後どうなるのかを研究してきました。いくつかの知見を得ることができましたが、まだまだ不明な事象は多く、ひとたび大地震が起きると多くの被害が生じてしまうことも大きな問題です。この地震による被害を減らすという点において、何をすべきなのか、何ができるのかを探究することが、現在の研究テーマです。

あらかじめマニュアルを作っておけば、発災時に迅速に活動できるのではないかと考えていました。しかし、何をすべきなのかは、自らの状態や周りの環境によるため、必ずしも行動を一つに決められません。その都度、状況を把握して、より良い行動を選択することが重要です。そのためには、第二、第三の解決策を準備しておくことも必要です。

1. 何が起きているのかを把握する(どんな情報をどうやって手に入れるのか)
2. その情報を元に、どうなるのかを予測する
3. その予測に基づき、どう行動すべきなのかを判断する
4. これらの行動を可能にするために準備をする

● 最近の観測例

- (1) 能登半島(珠洲市・輪島市・能登町)での臨時地震観測(2022年～継続中)
- (2) 奥静岡での臨時地震観測(2022年～継続中)
- (3) 谷根干・上野周辺での臨時地震観測(2020年～2024年)
- (4) 神奈川県箱根山における広帯域地震観測および広域地震観測(2015～継続中)
- (5) 首都圏地震観測網MeS0-netによる研究プロジェクト等(2002～継続中)

海底地震・地殻変動観測

篠原 雅尚



教授 篠原 雅尚

海底観測から解明するプレート境界型地震

海底地震計や海底水圧計を用いた海域における地震・地殻変動観測からプレート境界及びその周辺での地殻活動や構造の研究を行っています。また、観測を推進させるための海底観測測器の開発・改良も行っています。

メンバー：教授 篠原 雅尚、助教 山田 知明、悪原 岳
大学院生（博士課程1名）

Tel: 03-5841-5794

E-mail: mshino@eri.u-tokyo.ac.jp

居室：地震研究所 1号館 509号室

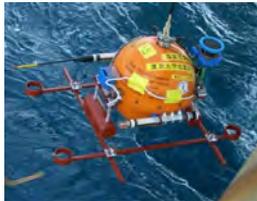
<https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/mshino>



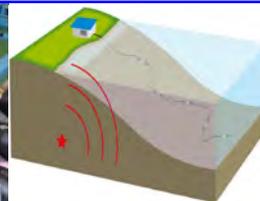
海底で地震や津波を観測する方法は主に2通り

- 自由落下自己浮上式海底地震・水圧計
- 海底ケーブル式地震・津波観測システム

測器開発を伴う新しい観測を実施することにより、新しい現象の発見、現象の詳細な把握をめざしています。



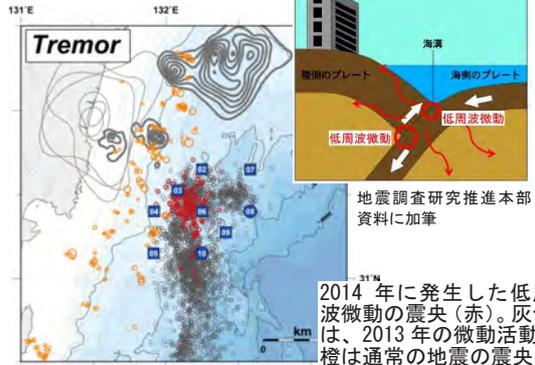
開発した自由落下自己浮上式海底地震計



海底ケーブル式観測システムの新開発観測装置

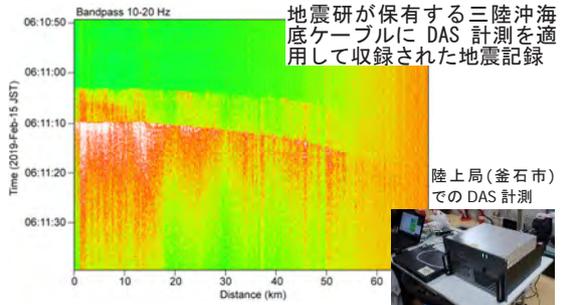
1. 自由落下自己浮上式海底地震計を用いた主な現在の研究テーマ

南海トラフでの低周波微動活動の把握
プレート間固着と微動活動の関係が注目されています。



2. 光ファイバ海底ケーブル観測システムを用いた主な現在の研究テーマ

光ファイバ分散型音響センシング(DAS)による空間的超高密度海底地震観測
光ファイバにレーザー光パルスを送り、その散乱光を計測することで、ファイバ自身をセンサーとして観測を行います。



今後の目標

- 広帯域化を図った自己浮上式海底地震計による未知の現象の観測
- DAS技術による定常的地震観測による震源や構造の超高精度決定



教授 大湊隆雄

研究の概要

火山周辺では様々な種類の地震が発生します。本研究室では、火山周辺での地震観測データを解析することにより、火山内部構造や火山内部で起きる物理現象の解明を目指します。

火山の火口近傍での観測手法の開発や火山内部の地震波伝播に関する数値シミュレーションも進めています。

Tel: 03-5841-5810

E-mail: takao@eri.u-tokyo.ac.jp

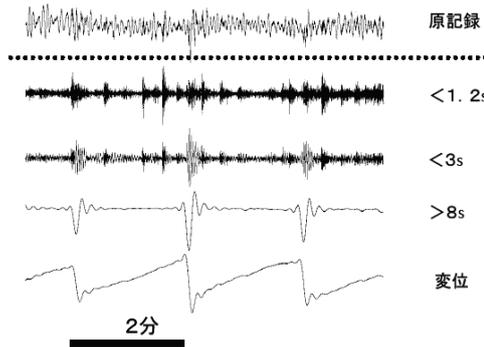
居室: 地震研究所 2号館 512号室

火山で観測される地震にはさまざまな情報が含まれている！

火山で観測される地震波は様々な情報を含んでいます。

右図は、異なる周波数成分毎に波形の様相が全く異なることを示しています。

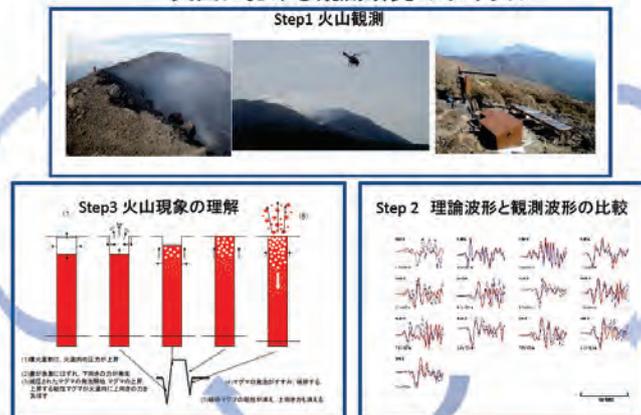
これらの波形から火山内部の物理現象に関する情報を取り出すことが本研究室の目標です。



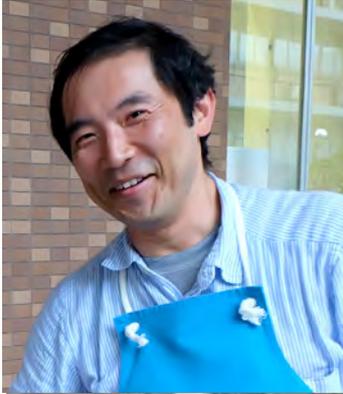
火山で観測される地震は、通常の地震のように岩石の破壊によって発生する地震の他に、マグマや熱水の動きによって発生する地震もあります。地震波を詳細に調べることにより、火山内部の応力状態、熱水やマグマの動きなどを推定することができます。

本研究室では、観測を中心とした火山研究を行っています。観測研究は、(1) 観測によるデータ収集 (2) データ解析 (3) 解析結果から火山現象を理解、という順に進みます。1 サイクル進むと、更なる疑問が生まれます。そこで、それを解決するために新たなデータを得るための観測を計画しつぎのサイクルに進みます。

火山における観測研究のサイクル



火山に興味をあればどなたでも OK. フィールドが好きの方、装置いじりが好きな方、数値計算が好きの方を歓迎します。



教授 新谷 昌人

私たちの研究グループは地球の内部構造や地殻活動を理解するために、新しい観測機器を開発しそれを用いた観測研究を行っています。特にレーザー干渉計などの最先端の光計測技術を用いることで、高い性能が得られるだけでなく地下深部・惑星表面など極限的な環境での観測も可能になります。未知の観測領域でどのような現象がみられるか、開発した最高性能の機器で明らかにしていきたいと考えています。

Tel: 03-5841-5821 E-mail: araya@eri.u-tokyo.ac.jp

居室：地震研究所 2号館214号室

<https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/people/araya/>

1. 観測精度を極める

地下深部の微弱な現象を捉えるためには、高い精度の観測が必要です。写真は岐阜県にある宇宙線研神岡施設の地下 1000m に設置された長さ 100m の装置で、私たちが独自に開発したものです。超精密なレーザー干渉計を使い、地面のわずかなひずみを観測し、地震の断層の動きを高い精度で観測しました。



2. 困難な場所で観測する

地球科学では地下深部・海底などしばしば過酷な場所での観測が必要となります。火山もそのひとつで、火口付近での観測はアクセスが難しく、装置を動かす電源も限られています。しかし、火山の息吹を捉えられる絶好の場所でもあります。マグマの動きなどに伴う重力変化を観測するための絶対重力計の開発を進めています。



3. 新しい観測窓を開ける

地球にはまだ観測されていない領域も多く、惑星や小天体ではそのごく一部しか観測されていません。光技術を使って、地球や惑星探査の極限環境でも使える地震計・重力計などの機器を開発し、それらの領域で新しい観測データを取得しようと挑んでいます。





くらしも えいじ

准教授 蔵下 英司

研究の概要

プレートの沈み込み運動によって内陸やプレート境界で地震発生に至るメカニズムを解明するために、観測地震学的手法を用いて、島弧地殻や沈む込むプレートの構造解明、地震活動に関する研究を進めています。

Tel: 03-5841-5684

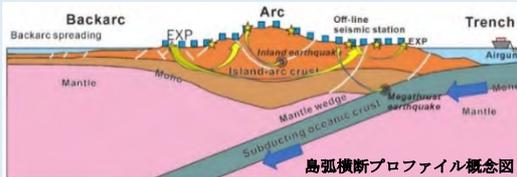
E-mail: ekura@eri.u-tokyo.ac.jp

居室: 地震研究所 1号館 504号室

<https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/people/people000902.html>

1. 海陸統合島弧横断断面図の構築

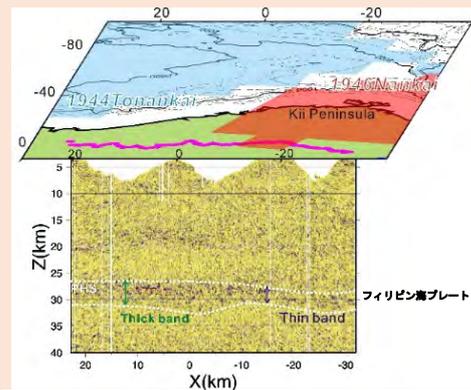
プレートの沈み込み運動によって内陸やプレート境界で地震発生に至るメカニズムを解明するためには、沈み込むプレートと島弧地殻/マンツルの相互作用による地殻活動の理解を深めることが重要です。その為には、背弧海盆から海溝に至る島弧横断プロファイルによる、上盤プレートや沈み込むプレートの幾何学的形状や不均質構造に関する知見が必要不可欠です。そこで、陸域での観測による内陸活断層の深部形状や島弧地殻の構造に関する研究に加え、海域調査と連携した観測を実施し、海陸境界域を含む海溝から内陸域を経て背弧に至る構造の研究を進めています。



独立型地震観測装置の設置風景

2. プレート境界域における不均質構造と断層すべり挙動との関係

スロー地震に代表される多様なプレート境界滑り現象が巨大地震震源域近傍で観測されています。これら滑り現象は、プレート境界面摩擦特性の不均質性に起因していると考えられます。そこで、制御震源・自然地震観測を実施し、そのような不均質性の要因となりうるプレート境界面の形状や境界面近傍の構造不均質を明らかにする研究を進めています。



反射法断面図。青と赤の領域は、それぞれ1944年東南海地震時と1946年南海地震時の滑りが1m以上の領域 [Baba and Cummins, 2005]。フィリピン海プレート上部に対応する反射層の厚さの変化が確認でき、トラフ軸に平行な方向での構造の変化が、プレート境界面上における摩擦特性の違いをもたらし、巨大地震破壊域の広がりや規定する要因となりうることを示しました。

今後の目標

- ・ 西南日本における海陸統合島弧横断断面図の構築
- ・ 多様なプレート間の滑り現象を規定する地下構造異常の抽出



(准) 教授 鶴岡 弘

研究の概要

地震波形データのリアルタイム流通基盤の構築を行うとともに、その基盤を利用したリアルタイム地震解析システムの開発や地震情報システムの開発を実施しています。

Tel: 03-5841-5691

E-mail: tsuru@eri.u-tokyo.ac.jp

居室: 地震研究所 1号館 603号室

<http://www.eic.eri.u-tokyo.ac.jp/tsuru/>

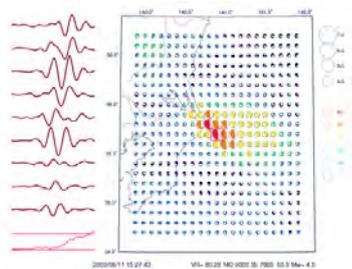
研究のキーワード: データ流通基盤, リアルタイム地震解析, 地震情報システム, 緊急地震速報, 地震活動, 地震活動予測検証実験

1. 地震データ流通基盤

広域高速データ流通基盤を活用した地震データ流通システムを関連する研究機関等と協力して全国の地震データ流通システムを運用しています。

2. リアルタイム地震解析&地震情報システム

地震データ流通基盤を用いたリアルタイム地震解析システム (GRiD MT&WPAHSE) 等を開発、運用しています。



3. 地震情報システムの開発

学内において、緊急地震速報に関する地震情報システム (放送装置を含む) を開発して管理・運用しています。

東京大学 地震研究所
Earthquake Research Institute

この予測震度 **1**

主要動到達まであと **9秒**

現在時間: 2011/4/18 14:35:23.38
地震ID: 20110418143455-003
発震(小)別一辨別: 110418143447
経度/緯度: 140.6 E / 37 N
深さ: 010 km
マグニチュード: 4.2
震央地名: 新潟県新潟市地方

ARW=2.280 R=161.429 I=0.7343

訓練の受信: OFF ON OFF 震度3未満 SOUND: ON ON OFF

リアルタイム地震解析は時間との闘いかつあらゆる例外対応を事前に検討する必要があります。リアルタイム解析は面白いですよ！

地震火山観測システム開発

中川 茂樹



准教授 中川茂樹

研究の概要

地震計などを用いて大地の動きを観測するところからデータの収集や他機関との交換、データの自動処理、研究者等による高度な解析、処理結果の情報発信までを一連の地震火山観測システムとして開発研究を行っています。

E-mail: nakagawa@eri.u-tokyo.ac.jp

居室：地震研究所 1号館602号室

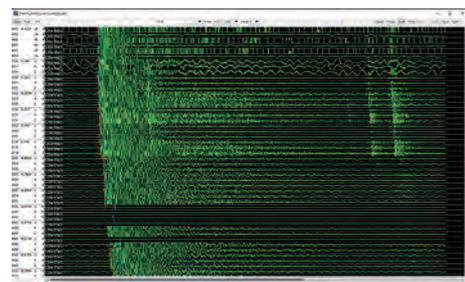
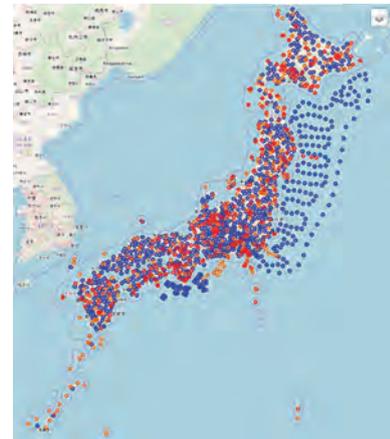
<https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/people/nakagawa/>

我が国では、大学、防災科学技術研究所、気象庁など様々な機関が全国約 2100 箇所に地震計を設置して、地面の揺れを 24 時間 365 日連続観測しています。そのデータは、国立情報学研究所が運用する SINET5 や情報通信研究機構が運用する JGN を使ったデータ交換網 JDXnet を通じて各大学や機関にリアルタイムで伝送されています。

さて、観測されたデータのほとんどは地球潮汐や人間活動によるノイズです。ノイズに埋もれた膨大なデータの中から「地震」を検出し、P 波と S 波の到達時刻を読み取って震源を推定する必要があります。これらの作業を目視で行うことは凡そ現実的ではないので、古くからコンピュータを用いた様々な手法が開発され、自動処理として実装されてきました。たとえば、地震の検出にはノイズと地震の振幅比を用いた手法が広く使われています。このようにして得た震源を使って、地震活動の時空間推移や地下の構造、震源の性質などを調べて可視化しています。

しかし、自動処理には誤検出などの課題も多く、様々なアイデアが試みられています。

当研究室では、大地の動きを観測するところから、そのデータの収集、他機関とのデータ交換、データの自動処理、研究者や技術者による高度な解析、処理結果の情報発信までをトータルのシステムとしてとらえ、所内をはじめとして全国の研究者等と連携しながら開発研究を進めています。また、「STAR-E人工知能と自然知能の対話・協働による地震研究の新展開」等の大型プロジェクトにも参画して共同研究を進めています。





教授 岩森 光

研究概要：地球ダイナミクス：惑星「地球」を俯瞰し、様々な手法を用いて、地球の生い立ち・現在・未来の姿、地震・火山現象のしくみに迫ります。

メンバー：岩森光（教授：野外調査、数値モデル）、坂田周平（助教：先端的化学・同位体分析）、森重学（助教：数値シミュレーション）、原口悟（研究員：データ解析）、院生・研究生 5名

Tel: 03-5841-5558 E-mail: hiwamori@eri.u-tokyo.ac.jp

居室：地震研究所 2号館 406号室

<https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/wp-content/uploads/2019/05/2019Iwamori.pdf>

なぜ金星・火星と異なり、地球は活発で賑やかなのか？ 活発な物質・エネルギー循環の理解は、地震・火山活動、極度な元素濃集・鉱床形成や散逸系としての生命活動理解にも重要。

野外調査

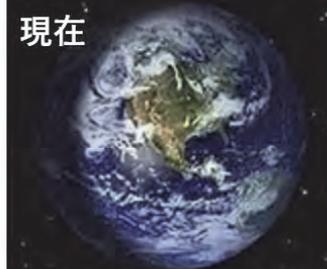


火山・温泉、海洋探査

誕生



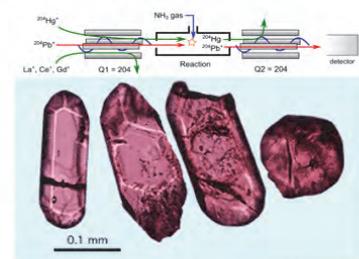
現在



未来

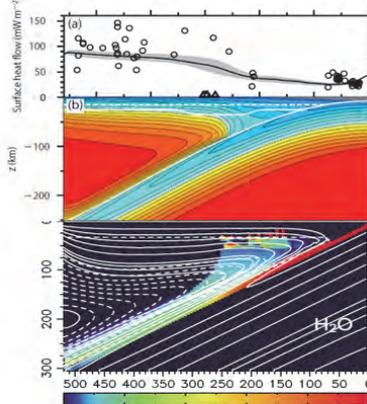


室内分析



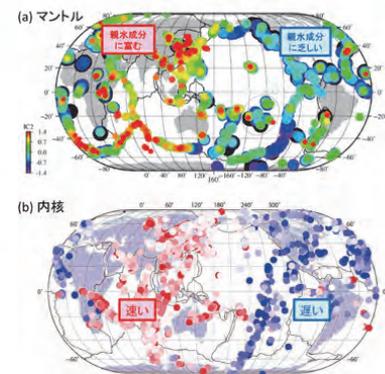
ジルコンの超高精度同位体分析

数値シミュレーション



沈み込み帯の熱・物質循環

大規模データ解析



マントルと内核の東西分割



准教授 青木陽介

メンバー

大学院生

曾小雨 (D1) ・ 青山哲也 (M2) ・

剣持拓未 (M2) ・ 松田瑞希 (M1)

協力教員：伊東優治 (助教)

居室：地震研究所 2 号館 205 号室

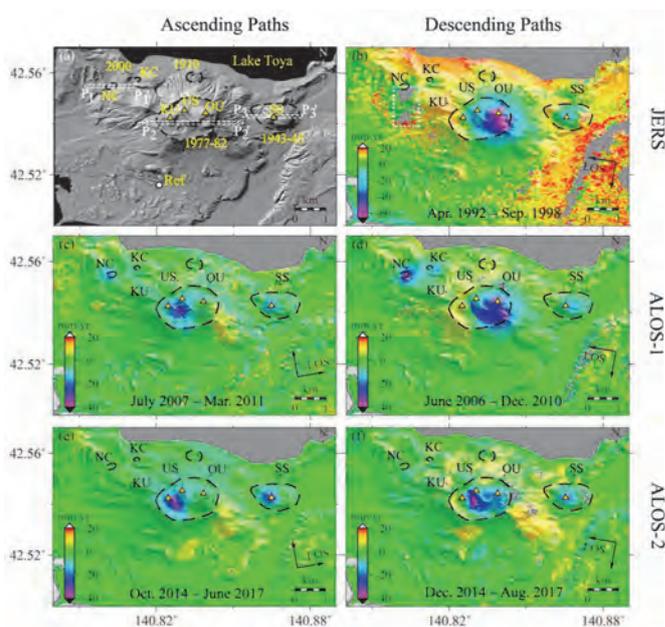
Email: yaoki@eri.u-tokyo.ac.jp

<https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/yaoki>



火山の地殻変動

活火山では、マグマや熱水の移動により地表が変形します。我々の研究グループではスマートフォンなどに用いられている GNSS や SAR といった宇宙測地技術を用いてマグマや熱水の輸送過程を推測し、地下の火山活動のメカニズムを探る研究をしています。



地震の地殻変動

地球上においては地震にともなう速い動きだけではなく、プレート運動による応力蓄積やスロースリップなどによるゆっくりとした変動も見られます。我々のグループでは、宇宙測地技術を用いて速い動きから遅い動きまで丸ごと理解しようと研究を進めています。



准教授 五十嵐俊博

研究の概要

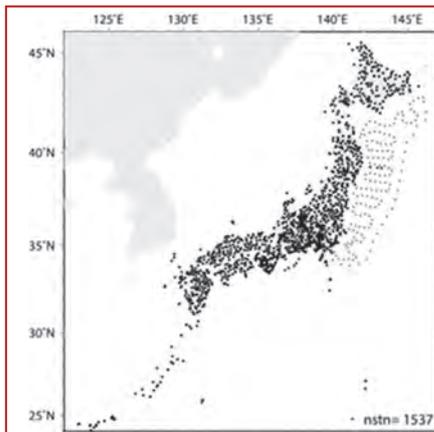
日本列島全域に展開されている地震観測網から得られる地震波形記録を活用して地震活動や地震波速度構造を調べ、地震が発生する場所の構造・状態の時間・空間的变化の特徴を描き出すことを目指した研究を行っています。

Tel: 03-5841-3833

E-mail: igarashi@eri.u-tokyo.ac.jp

居室：地震研究所 1号館 406号室

<https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/people/people000903.html>



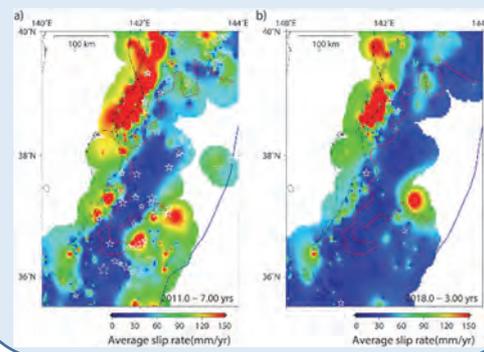
100年を超える気象庁の震源カタログ、地震研究所が30年以上にわたって蓄積してきた地震波形の連続記録および、研究の過程で作成される

- ・イベント波形記録
- ・繰り返し地震カタログ
- ・地震クラスター情報

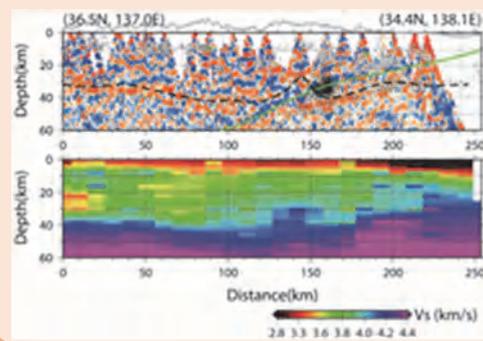
を積極的に活用した多様な研究活動を展開

使用している地震観測点

1. 繰り返し地震の再来特性に基づくプレート間すべりの推定



2. 地震発生域における地震波速度構造・地震波速度不連続の推定



今後も解析手法の高度化をはかりながら、断層面の固着状態やプレート内変形の空間分布・時間変化を見だし、地殻活動の変動要因を解明、さらにはその推移予測を目指した解析研究を進めていきたいと考えています。

アクティブテクトニクス / 変動地形学 石山 達也



准教授 石山 達也
(変動地形学・構造探査)

ishiyama@eri.u-tokyo.ac.jp

居室：地震研究所 1-407

<https://sites.google.com/view/t-ishiyama>



助教 白濱 吉起
(変動地形学・露出年代)

shirahama@eri.u-tokyo.ac.jp

居室：地震研究所 1-410

プレート収束帯の成り立ちを理解するために、変動地形・構造地質・構造探査等の観測に基づく、活断層・震源断層システムや地殻構造形成プロセスの解明に取り組んでいます。また、能登半島地震のような大地震がつくる変動地形や過去の大地震による地殻変動・地震発生時期の解明や、宇宙線核種を用いた露出年代法等によるテクトニクスにも取り組んでいます。国内外の活断層・変動地形・古地震やプレート収束帯のテクトニクス、年代学、物理探査などに興味のある皆さんを歓迎します。一緒に考えましょう！

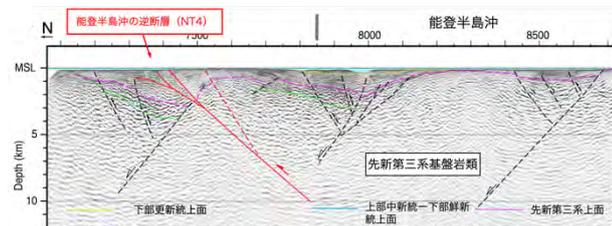
研究テーマ：変動地形学・構造地質学・構造探査によるプレート収束境界の地形の成り立ち、活断層・震源断層システム、島弧ジオダイナミクスの解明

研究室メンバー：

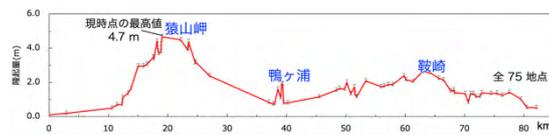
研究生 伊藤直毅（北部フォッサマグナの構造発達）

M1 福永拓真（古地震・変動地形）

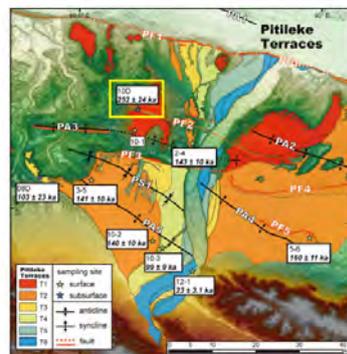
特任研究員 加藤直子（反射法データ解析）



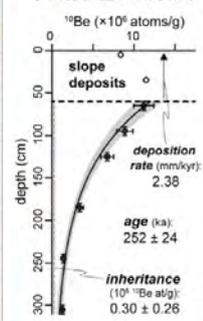
構造探査による 2024 年能登半島地震
震源域の地殻構造



2024 年能登半島地震による海岸隆起



宇宙線核種の測定結果



チベット高原における露出年代法の適用

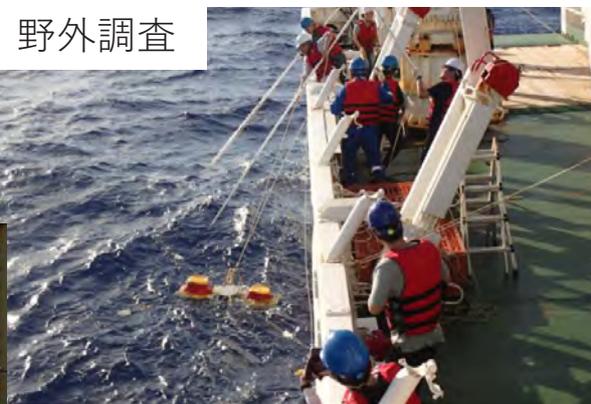
学生会からのメッセージ



地震研の 学生生活



野外調査



一般公開



広い研究スペース



学生会とは？

地震研の学生によって構成される
自治組織

地震研はこんなところが良い！

①複数分野の知見を得る機会がある

・金曜セミナー・談話会 etc...

②海外の学生と交流する機会が沢山ある

・さくらプログラムによる来所 ・多くの留学生

その他にも、こんな声があります。



学生会所属
Aさん

学生同士の学年を
超えた交流が活発
である

談話会や学生
weekなど、様々
な分野の人と
議論する機会が
多くある



学生会所属
Bさん

留学生との交流



学生会からのメッセージ



よくある質問にお答えします！

☆ 希望する先生へのアプローチの仕方



- ① まずはメールを送り、進学先として考えていること、詳しく話を聞きたいということを伝え、研究室に訪問させてもらえるようにお願いします。どの先生も優しく対応してくれます！
- ② 先生の具体的な研究内容や、進学後に希望する研究について相談することができます。入学試験の小論文に向けてしっかり相談しましょう。また、所属している学生に会うことができれば、入試対策や大学院生活などの様々な話を聞くことができます。
- ③ 出願時に希望する指導教員を書く欄があるので、出願前に確認の連絡をすると良いでしょう。合格後、指導教員決定のための面談を行い、11月ごろに正式に決定します。ただし、1人の先生につけるのは同学年で2人までなので注意が必要です。

実際の例（修士課程1年）

☆ 学生の1週間のスケジュール

- ・ 修了要件として16単位必要になります。そのため、M1の間は授業がやや多くなる傾向にあります。
- ・ 毎週2つのセミナー(論読・コロキウム)に参加することになります。

スケジュールを上手に管理して研究を進めましょう！

	月	火	水	木	金
	登校				
10:00	研究	TA	自主ゼミ	研究	授業
12:00	昼				
14:00	セミナー	授業	授業	授業	TA
16:00	研究	授業	セミナー	研究	
18:00		研究	研究		研究
	下校				

☆ その他のセミナー・イベント類

- ・ 金曜日セミナー、談話会（毎週金曜日） 様々な分野の研究発表を聞くことができます。
- ・ 学生 week（11月中旬） 修士中間発表会に併せて、M2以外の学生もポスター発表を行います。
- ・ 学会 JpGU（5月下旬）、地震学会（10月）、火山学会（10月）など
- ・ 一般公開 地震研究所の研究紹介とともに学生会主催の公開実験を行います。今年度から現地開催が復活します！

皆さんの入所をお待ちしております！

アクセスマップ Access to ERI



地震研究所は、東大本郷キャンパスに属していますが、
安田講堂などのあるキャンパス中央とは別の街区にあり、
徒歩で約10分離れています。
農学部からは、グラウンド脇の構内通路（徒歩、自転車のみ）が利用できますが、
地下鉄でお越しの場合は農学部を通らず、
外の道路（点線のルート）を経由されることをお勧めします。

最寄駅 地下鉄 千代田線「根津」1番出口 徒歩10分
南北線「東大前」1番出口 徒歩5分

10 min. walk from Nezu Station (Exit 1), Subway Chiyoda Line
5 min. walk from Todai-mae Station (Exit 1), Subway Nanboku Line

令和7年（2025年）5月発行

編集発行：東京大学地震研究所

編集 若手育成・教育推進室

東京都文京区弥生1丁目1番1号

ホームページ：<http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/>

本ガイドンスに関する問い合わせ先：前野 fmaeno@eri.u-tokyo.ac.jp